

[論文]

## 詩人としての John Keats の転換点

“Spenser! A jealous honourer of thine”

奥田 喜八郎\*

### On the Poet John Keats's Turning Point in His Poem “Spenser! A jealous honourer of thine”

Kihachiro OKUDA

The purpose of this paper is to clarify the poet John Keats's turning point in his poem entitled “Spenser! A jealous honourer of thine.” The first thing to explain is that a sonnet has 14 lines. Each line has 10 syllables, and the poem has a fixed pattern of rhymes. The poet Keats uses the English sonnet. The sonnet form perfected by William Shakespeare (1564–1616) is composed of three quatrains and a terminal couplet in iambic pentameter with the rhyme pattern (abab / cdcd / efef / gg). It is also called the Elizabethan sonnet. The second is to explain that Edmund Spenser (1552–99) is an English poet known chiefly for his allegorical epic romance *The Faerie Queene* (1589, 1596). His other works include the pastoral *Shepherd's Calendar* (1579) and the lyrical marriage poem

---

\*おくだ・きはちろう：敬愛大学国際学部教授 英米文学概論・英語史・異文化コミュニケーション

Professor, Faculty of International Studies, Keiai University; English Literature History, English Language Origins, Introduction to English and American Literature, Intercultural Communication.

“Epithalamion.” Spenser is also called the “Elfin Poet.” The third is to explain that Elves impersonate the shimmering of the air, the felt but indefinable melody of Nature, and all the little prettinesses which a lover of the country sees, thinks he sees, in hill and dale, copse and meadow, grass and tree, river and moonlight. Spenser says that Prometheus called the man he made “Elfe,” who found a maid in the garden of Adonis, whom he called “Fay,” of whom all “Fayres” spring. Elfe is Adam in the Old Testament, the first man. Fay is also Eve in the Old Testament, the first woman. Jesus Christ is also the second Adam. The fourth is to explain that Phoebus is the god of the sun in *Greek Mythology*. Apollo is called Phoebus (the sun-god), from the Greek verb *phao* (to shine). John Keats is the second Phoebus as well.

In conclusion, John Keats once honoured and imitated Edmund Spenser as a poet. Imitation is the sincerest form of flattery. Flattery is also flattery. Keats’s desertion of Spenser is suggested by his renewed interest in the sun-god Phoebus. It is splendid for Keats to rise like Phoebus with a golden quell fire-winged there in England. It is marvelous for Keats to make a morning in his mirth, that is his amusement. It is his dream to express his own fresh laughing, there in England. Keats’s mirth is connected with his masterpiece “Ode on a Grecian Urn,” in the autumn of his life. This is the Romantic poet Keats’s turning point in his poem entitled “Spenser! A jealous honourer of thine.” Keats’s genius blossoms early with Phoebus’s spiriting, and Keats blossoms out into a great Romantic poet.

イギリスのロマン派詩人 John Keats (1795 – 1821) に、白眉 “Spenser! A Jealous Honourer of Thine” という 14 行詩がある。これは、「スペンサーよ！貴方を敬う一人のねたむ崇拜者」と題するのだろう。詩人 Keats はこう歌い上げるのだ。

Spem/-ser! A jeal/-ous hon/-our/-er of thine,  
 A for/-est/-er deep in thy mid/-most trees,  
 Did last eve ask my prom/-ise to re/-fine

Some Eng/-lish that might strive thine ear to please.  
 But, Elf/-in Po/-et, 'tis im/-pos/-si/-ble  
 For an in/-hab/-it/-ant of win/-try earth  
 To rise like Phoe/-bus with a gold/-en quell  
 Fire-winged and make a morn/-ing in his mirth.  
 It is im/-pos/-si/-ble to es/-cape from toil  
 O' the sud/-den and re/-ceive thy spir/-it/-ing—  
 The flow/-er must drink the na/-ture of the soil  
 Be/-fore it can put forth its blos/-som/-ing.  
 Be with me in the sum/-mer days and I  
 Will for thine hon/-our and his pleas/-ure try.

ご覧の通り、これは、見事な一篇の sonnet である。

Sonnet というのは、ご存知のように、3 種類の詩型がある。共通するのは、共に 14 行詩であり、また、各行が「弱強調 5 歩格」である。念のために、以下に紹介しておこう。(1) イタリア風ソネット (Italian sonnet) では、8 行の octave (/abba/ /abba/ の押韻形式をとる 2 つの quatrains) に、6 行の sestet (/cdc/ /dcd/ または /cde/ /cde/) から成る。これは、別に、Petrarchan Sonnet という。(2) 英詩に多いのは、イギリス風ソネット (English sonnet) である。これは、3 つの 4 行連句 (quatrains) に、押韻の対句 (couplet) がつき、押韻形式は、(/abab/ /cdcd/ /efef/ /gg/) となる。これを、別に、Shakespearean sonnet という。それに、(3) スペンスー風ソネット (Spenserian sonnet) がある。これは、上記の (1) と (2) を合わせたもので、(/abab/ /bcbc/ /cdcd/ /ee/) という押韻形式によるソネットである。特徴は、一見すると、イギリス風ソネットのようであるが、よく吟味すると、イタリア風ソネットの押韻を取り入れていることである。例えば、4 行目と 5 行目の押韻は対句 (b/b) と成る。さらに、8 行目と 9 行目の押韻もまた対句 (c/c) と成るのが、特徴である。これは、詩人 Keats がその昔、大いなる尊敬の念を捧げた先輩詩人 Edmund Spenser (1552 - 99) の創案した

Sonnet である。

ここに詩人 Keats が歌う「スペンサーよ！貴方を敬う一人のねたむ崇拜者」と題する、この 14 行詩は、上記に既に紹介した (3) のスペンサー風ソネットではなく、(2) のイギリス風ソネットであるのが、面白い。偉大な詩人 Spenser を敬う友人（以下に述べる）の事を思えば、やはり、ここはスペンサー風ソネットを用いるべきであろうか、と思われるからである。しかし、詩人 Keats は、友情に感謝しながらも、先輩詩人 Spenser との決別を固く意図して、さらに、新しい詩歌を求めて、あえて、イギリス風ソネットを使用しているのも、興味深い限りである。

なにはともあれ、先ず、先輩詩人 Edmund Spenser について、以下に概観しておきたい。

Edmund Spenser は、無論、イギリスの詩人である。相当な身分の高い家系のものであるが、あまり裕福ではなかったという。Spenser は仕立職人の子として、ロンドンの East Smithfield に生まれた。East Smithfield というのは、ロンドンを貫流して北海に注ぐテムズ川に架けられた Blackfriars Bridge を渡ると、New Bridge Street が北上する。それを辿っていくと、Farringdon Street に通じる。それをさらに北上すると、十字路に辿り着く。左側には、St. Andrew 教会が見える。その十字路を横断すると、右折する道がある。これが、West Smithfield Long Lane である。その道を東に向かっていくと、右側に West Smithfield 公園がある。その真向かいに Smithfield Market の建物が立ち並ぶ。さらに、東に向かうと、右側に St. Bartholomew the Great 教会がある。恐らくは、この教会の近くの何所かが、Spenser の生誕の地であると思われる。

Blue Guide によると、

Smithfield, more particularly known as West Smithfield to distinguish it from the less important East Smithfield near Tower Hill, is a place of great historic interest, though now noted mainly as the site of the principal London meat market. Originally a spacious 'smoothfield' or grassy expanse just outside the City Walls, it was the scene of various famous tournaments, and from

1150 to 1855 it was the chief horse and cattle market of London.

と案内する。「何もない East Smithfield と比べてみると、West Smithfield の方は、ロンドンの主要な食肉マーケットの地として、よく知られている」という。この Smithfield は、「元 Smoothfield といわれ、辺り一面に草原が広がっていた」という。昔、この地で、「中世騎士の馬上試合が行われていた」という。筆者は嘗て大学院生の頃、Spenser の面影を求めて、この辺りをさまよったことがある。その頃の記憶が走馬灯のごとく蘇り、懐かしい限りである。

Spenser は、Cambridge (Pembroke Hall) 大学に学び、そこで古典と、フランス語、それにイタリア語を勉強した。勉学に励みつつ、一方、詩作もこの頃から既に始めていたようだ。イタリアの詩人で人文主義者 Francesco Petrararch (1304 - 74) の傑作『詩歌集』(*Canzoniere*, 1350) を英訳したり、また、フランスの詩人 Joachim Du Bellay (1522 - 60) の作品を英訳したという。

前者の Petrararch とは、上記に既に紹介した、「イタリア風ソネット」、別な、「ペトラルカ風ソネット (Petrarchan sonnet)」といわれる 14 行詩の創案者である。

後者の Du Bellay は、あの the Pleiad の一人である。彼は『フランス語の擁護と顕揚』(*La Defense et illustration de la langue francaise*, 1549) で、the Pleiad 派を宣言した一人として有名である。ここにいう、Pleiad とは、『ギリシャ神話』に登場するプレイアデス (Pleiades) の一人という意味である。この、the Pleiad は、Atlas の 7 人の娘をいう。例えば、Alcyone, Celaeno, Electra, それに Maia, Merope, Sterope (別に Asterope という), それに Taygete の 7 人である。この 7 人の娘たちは、Orion に追われて星になったという。そのうちの Merope は、人間を愛したことを恥じて、姿を隠したので、the Lost Pleiad と呼ばれ、その故にプレアデス星団には、星が 6 個しか見えないのだという。『天文学用語』として、これは、ご存知の、「すばる座」のことをいい、「おうし座中の散開星団」をさす。別に、the Seven Sisters ともいう。このギリシャ神話を踏まえて、J. Du Bellay や、Ronsard などが 16 世紀にフラ

ンス詩壇における、いわゆる「7人の詩人」を立ち上げたのである。

学生 Spenser は、大学時代に、Gabriel Harvey (1545 ? - 1630) や、Edward Kirke (1553 - 1613) などの一生涯の友を得ただけでも幸せであった。がしかし、友人 Harvey は、修辞学者で詩人であり、また風刺詩をよくして、当時の詩人 Robert Greene (1560 ? - 92) を攻撃したり、また、Thomas Nashe (1567 - 1601) を論難したりして、親友 Spenser に必ずしも好ましからぬ影響をあたえたといわれる。Kirke は、親友 Spenser の傑作『羊飼いの暦』(*Shepherd's Calendar*, 1579) に、'E. K.' という署名で、その序や、筋書き、及び註釈などを附したといわれているのだが、どうも、'E. K.' は Spenser 自身だという説もある。ご教示を是非賜りたい。

1576 年、Spenser は 24 歳で、Cambridge 大学を去ってから、1578 年に友人 Harvey の紹介で、Leicester 伯爵の庇護を受けるようになり、その伯爵邸に寄寓する身の上となる。この 3 年間の Spenser の動静は、Rochester の監督 John Young の秘書をしたという記録があるが、濃霧に包まれたままで明らかではない。ただ青年 Spenser が、どうも、'Roselind' という女性に失恋の痛手を体験したのも、この濃霧に包まれた頃のことであり、この失恋の痛手を下敷きにして、また、Plato の恋愛観の影響を受けて、歌い上げたのが「賛歌四篇」("Fowre Hymnes") の最初の二篇 ("Hymne in Honour of Love" と "Hymne in Honour of Beauty") である、と推定するものもあるという。面白い。思うに、これが詩人 Spenser の処女作品であろうか。この二篇の詩題を見ると、詩人 Keats の歌う "Spenser! A Jealous Honourer of Thine" という詩題に、どこことなく重なる感があると思うのだが、どうであろうか。

伯爵 Leicester 家に寄寓後、青年 Spenser は、Sir Philip Sidney (1554 - 86) ともし親交を結び、詩人 Sidney と、E. Dyer などと共に、詩文愛好の同志を集め、クラブ 'the Areopagus' を立ち上げたという。The Areopagus とは、古代ギリシャのアレオパゴスを指す。これは、ご存知の、アテネ (Athens) の丘のことである。ここに置かれた評議会は貴族政治以来保守派の牙城であって、政治的実権を握っていた、といわれる。この、昔の政治的実権の牙

城を踏まえて、イギリスの青年詩人らが詩文愛好の同志の絆を結び、青年詩人らの活躍の場となり、地中海の文化や詩文などを北海のイギリスに紹介するに至るのである。

1579年、詩人Spenserは、処女詩集『羊飼いの暦』を出版する。当時、彼は27歳であった。この処女詩集が詩壇の大歓迎に浴し、待望の新星の出現として、当時の詩人たち、即ち、Sidneyや、Nasheや、George Peele（1558？ - 97？）等から一斉に賞賛を浴びた。詩人Spenserは、一躍大詩人の地位を確立したばかりでなく、エリザベス朝時代の抒情詩の盛観の帳がここに開かれた感がある。さらに驚嘆すべきことは、この頃既に、あの大傑作『妖精の女王』（*The Faerie Queene*, 1589, 1596）が起稿されていたことである。

1579年、偶々、恩人Leicester伯爵がエリザベス女王の怒りに触れて、遠ざけられたために、大詩人Spenserは直ちにペンをとって、時局風刺詩『ハバード小母さん物語』（*Prosopopoia, or Mother Hubberds Tales*, 1591）を書き上げ、恩人Leicester伯爵の恩義に報いた。「ハバード小母さん」というのは、ご存知の、イギリスの童謡の題名でありその主人公である。別に、Old Mother Hubbardともいう。これは、イギリスの子守唄で、Mother Hubbardが犬にあげる骨を捜すが、見つからず、いろいろと犬の機嫌をとる。その小母さんと、犬との挨拶の交換が歌われている。

歌詞は1番から14番まですべて、「ハバード小母さんは、犬のために何々を手に入れようと、何所どこへ行ったが、戻ってくると、犬は何々をしていた」という構成になっている。例えば、1番の歌詞は、

Old Mother Hubbard  
Went to the cupboard,  
To fetch her poor dog a bone;  
But when she came there,  
The cupboard was bare,  
And so the poor dog had none.

というふうに、歌われる子守唄である。

この童謡を下敷きにして、詩人Spenserは、思わしくない住居を見捨て

た猿と狐とが、いろいろと姿を変えて旅をするが、しかし、遂に、神々の王ユーピテル (Jove = Jupiter) に元の姿を露わせられる、という粗筋の詩を書いている。これは、当時の教会と宮廷を風刺したものであるという。これは、1579年から1580年にかけての執筆であって、その11年後の1591年に出版された『苦情苦言』(*Complaints*)の中に、この風刺詩が採録されているという。

しかし、恩義に報いたのは、つかの間のことで、その結果は却って、大詩人 Spenser の不利益に終わる。1580年に Arthur Grey de Wilton がアイルランド総督となるに及んで、Spenserはその秘書となって、アイルランドに渡る結果となるからである。

1581年、Lord Greyは本国に召還されたが、秘書官 Spenserは官吏として、そのままアイルランドに止まり、1586年には Munster 地方植民開拓官となる。Munsterは現在、アイルランド共和国の南西部の一地方である。ここは Clare、Cork、Kerry、Limerick、Tipperary、そして Waterford の6州から成る。首都は Cork である。

因みに、アイルランドは大きく4つの地方から成る。(1)Ulster、(2)Leinster、(3)Connacht、それに、(4)Munsterである。(1)Ulsterは、アイルランド島北東部の旧地方で、今は北アイルランドとアイルランド共和国の一部 (Cavan、Donegal、Monaghan の3州) に分離する。(2)Leinsterは、アイルランド共和国東南部の地方で、Carlow、Dublin、Kildare、Kilkenny、Laoighis (Leix)、Longford、Louth、Meath、Offaly、Westmeath、Wexford、Wicklow の諸州から成る。そして、(3)Connachtは、アイルランド共和国北西部の一地方で、旧名は、Connaught という。

官吏 Spenser は、重複するが、(4)Munster 地方の植民開拓官となり、さらに、1588年には、この地方の Cork の近くに豪壮な邸宅 Kilcolman Castle を入手して、ここに移り住み、詩人 Spenser として文筆に親しみながら、遂に一生をアイルランドに過ごしたという。

Blue Guide を見ると、

Some 3m. N. W. of the village stand the ruins of Kilcolman Castle, the



home—or in an adjacent house—for eight years of Edmund Spenser, who wrote here the first three books of the ‘Faerie Queene’. The castle is ruined above the ground floor, but the top of the walls can be reached by a turret stair. The demesne is now part of a wildfowl refuge, and access is normally restricted. Spenser, as secretary to Lord Grey, the Lord Deputy, came into possession of the property in 1586 after the forfeiture of the Earl of Desmond’s estates, and took up residence in 1588; but in the following year a visit of his friend Raleigh decided him to publish his poem, and he moved to London, remaining there until 1591, when he reluctantly returned to Kilcolman—the period of ‘Colin Clouts come home again’—and remained here until 1598, when the house was burned during Tyrone’s rebellion. In 1594 he married Elizabeth Boyle, daughter of a gentleman of the neighbourhood.

と案内する。この豪壮な邸宅で、詩人 Spenser は 8 年間暮らす。イギリス詩文の水準を高めることを共に目ざした親友 Sir Philip Sidney の死を悼み、『アストロフェル』(*Astrophel*, 1586) を書き上げたのも、この邸宅で、である。この詩題は、Sidney の恋愛ソネット集『アストロフェルとステラ』(*Astrophel and Stella*, 1580 – 84 作) の詩題を踏まえたものである。詩人 Sidney は、愛する女性を「ステラ」(= 星) と呼び、自らを「アストロフェル」(= 星に憧れる者) に喩えていることを思い合わせると、Spenser もそれに則って、Sidney の星に憧れる者と題して切々と歌うのは、感銘深い限りである。注目すべきことは、大作『妖精の女王』もまた着々と進行し、1599 年に、その前半の 3 巻が出版されたことである。当時、Spenser は 38 歳であった。文壇はその出版を見て、こぞってその詩才に驚嘆し、Elizabeth 女王もまたこれを嘉納し、詩人 Spenser に年金 50 ポンドを与えたという。

1589 年、友人 Sir Walter Raleigh [Raleigh] (1552 ? – 1618) の勧めによって、Spenser はロンドンに出て、宮廷に帰還を懇願したが、結果は空振りに終わり、志を果たせず、1591 年に再び悄然としてアイルランドに戻った。当時の Spenser の心境を語るものは、1591 年に出版した、“Colin Clouts

come home again”である。これと前後して、初期の作品を集めた *Complaints* と、それに Lady Douglas Howard の夭死を悼む哀詩 *Daphnaida* を出版したが、その後、遂にロンドンに帰る望みを断ち切り、アイルランドでの詩作に精進する。

1596 年、詩人 Spenser は、『妖精の女王』の後半 3 巻を発表する。当時、Spenser は 44 歳であった。(1)後の Spenser の妻となった Elizabeth Boyle への思慕を歌い上げた *Amoretti*、(2)1594 年には Boyle との結婚を祝福した *Epithalamion* (*Amoretti* と合本、1595 年に出版)、それに、(3)ロンドン滞在中 Worcester 伯爵家の次女の結婚を祝した *Prothalamion* (1596 年に出版)、さらに、(4)美と愛とに対する異教徒的な青春の頌歌と、キリスト教徒的な天上の賛歌とを併せた *Fowre Hymnes* (1596 年に出版)、その上、(5)散文の代表作 *A Short View of the Present State of Ireland* (1595 - 97 年に執筆し、1633 年に出版)などの傑作が相次いで書かれた。

しかし、その相次ぐ執筆活動が祟って、1597 年頃から、Spenser の健康は衰えを示し始めたという。翌 1598 年、アイルランド民衆の蜂起によって、Spenser の Kilcolman Castle もまた突然の焼き討ちを受け、Spenser は家族と共に辛うじて Cork に逃れたという。これは、Blue Guide によると、Tyrone's rebellion といわれる反乱である。間もなく、Spenser は官命によって、また上申のためにロンドンに上京する。上京中、Spenser は、翌 1599 年 1 月に病に倒れてロンドンで客死する。享年 47 歳という若死である。

詩人 Spenser は、詩人のお墓といわれる、Westminster Abbey に眠る。しかも、Spenser が生涯敬愛を惜しまなかった Geoffrey Chaucer (1340 ? - 1400) の傍らに、今も、眠るのである。この Westminster Abbey というのは、ロンドンにあるゴシック式建築の教会堂である。正式名は、The Collegiate Church of St. Peter in Westminster という。Edward the Confessor が 1050 年頃建立に着手。国王の戴冠式はこの教会堂で行われる。ここに葬られることは、イギリス人の最大の荣誉とされる。

農民の反乱によって、焼き討ちの際、Spenser の Kilcolman Castle が焼失するとともに、あの傑作中の傑作『妖精の女王』の続稿もその運命を共にし

たものといわれている。返す返す、残念至極である。この大作は、詩人 Spenser の腹案の半ばを完成したのみで、永久に未完成が惜まれるものである。

思い返せば、詩人 Spenser は、27 歳の時既に、牧歌集『羊飼いの暦』を公にした。その自由な韻律と清新な内容は、エリザベス朝の詩壇に一時代を築き、その後、『妖精の女王』は勿論、完璧の絶唱といわれる *Epithalamion*、その他上記の諸傑作は、詩人 Edmund Spenser を、先輩詩人 Geoffrey Chaucer 以来の大詩人として、また演劇に於ける William Shakespeare (1564 - 1616) とともに、イギリス・ルネサンスの頂点を示す最高峰に押し上げたのである。そればかりでなく、詩人 Spenser は、所謂、‘the poets’ poet’ (「詩人のなかの詩人」と称される評語こそが、最も相応しく、詩人的天分の純粹で且つ豊富な点においては、『イギリス文学史』上に冠絶しているという。

詩人 Edmund Spenser の思想的背景には、所謂、(1) Renaissance の子としての Spenser と、(2) Reformation の子としての Spenser との矛盾に蔽い切れないものがあるという。即ち、(1) Plate の異教主義的恋愛観と、(2) Aristotle の人文主義的哲学の影響と、(3) キリスト教的清教思想の稟質と、が美しい調和融合におかれるというよりは、むしろ、無統制に取り入れられていて、混乱を示していることは否定できないという。その詩的完成に至っては、Spenser の創始になる ‘Spenserian Sonnet’ や、‘Spenserian Stanza’ をはじめとして、詩人 Spenser の特徴は、(1) その韻律の陶醉忘我的な音楽美と、(2) 豊醇瑰麗な形象の絵画美と、が調和融合していることである。後のイギリス・ロマン派の詩人 John Keats をはじめ、浪漫情調復興後の詩人たちに与えた影響は大きいという (これは、研究社発行『英米文学辞典』より、そのまま基底として纏めたものである)。

中野好夫は、上記に示す通り、詩人 Edmund Spenser について、(1) その韻律の陶醉忘我的な音楽美と、(2) 豊醇瑰麗な形象の絵画美とが調和融合していることを高く評価する。川崎寿彦も『イギリス文学史入門』の中で、詩人 Edmund Spenser について、

(1)「豊醇華麗なる絵画美」と、(2)「人を陶醉境に誘う音楽美」とを併せ持ち、英詩の一方の極として、ながく人々の仰ぎ見るところとなった。

と高く評価する。中野も、川崎も、共に同じ詩人 Spenser 観である。思うに、詩人 Keats もまた、その昔、中野や、川崎と同じような、詩人 Spenser 観を強く抱いていたのかも知れない。がしかし、この当時の詩人 Keats 自身は既に、詩人 Spenser を卒業して、新しい詩興を目指し始めていた、と筆者は思う。

この一篇の Sonnet を味読する限り、詩人 John Keats の模索する思想的背景は、時代が移り変わり、(1)地中海の開かれた「初期の、異教主義的恋愛観」の申し子としての Keats と、(2)北海の閉ざされた「新しい過渡期の、混乱するキリスト教的清教思想」の稟質の申し子としての Keats と、がまだ混沌として、まだ無統制に取り入れられていて、混乱を呈していることは否定できない。がしかし、詩人 Keats は、新しいイギリス詩壇の頂点へと、その階段を一段一段、確実に上っていることは確かである。

前置きが長くなったが、詩人 Keats の歌い上げる作品に戻ろう。冒頭に紹介した 14 行詩は、Miriam Allott が編集した『ジョン・キーツ詩集』(*The Poems of John Keats*, 1986) から引用した sonnet である。念のために、John Barnard が編集した『ジョン・キーツ全詩集』(*John Keats: The Complete Poems*, 1988) のそれと比べてみると、些細にして、重要な相違が目立つ。Barnard 版によると、先ず、1 行目は、

Spenser! a jealous honourer of thine,

と歌う。不定冠詞 a が小文字である。小文字であれば、普通の歌い方であるが、しかし大文字であれば、意味がより強くなる。世の中にあなたを崇拜する者が、数える事が出来ないくらい居る。がしかし、私はその中の一人である、と視覚的に強調する。あなたを崇拜するにかけては、他の崇拜者よりもさらに熱狂的である、と絵画的に強く明示するのが大文字である。

また、7 行目の最後は、コンマを用いる。そして、8 行目も、Fire-winged, というふうに、ここもコンマを用いる。さらに、10 行目の最後も、コンマ

を使う。両者の間に、このように句読点の相違がある。

それに対して、Ernest de Selincourtが編集した『ジョン・キーツ詩集』(*The Poems of John Keats*, 1920)を参照してみると、Barnard版よりも、コンマの使用が多い。3行目は、Did, last eve, ask my promise to refineと歌う。また、4行目は、Some English,と歌う。さらに、5行目は、But, Elfin-poet! とハイフンと感嘆符を用いる。7行目は、To rise, like Phoebus,と2個のコンマを使う。その上、8行目は、Fire-wing'dと短縮形を使う。9行目は、to 'scapeとここにも、短縮形を用いる。12行目の最後は、コロンのを使う。13行目は、in the summer days,とコンマを使用する。先ず、読者は、コロンのとセミコロンのの区別を確実にしよう。コロンのや、ハイフンや、アポストロフィなどの使い方を身に着けよう。

それでは、この14行詩の韻律を調べてみよう。気になるのが、9行目と、10行目と、11行目である。御覧の通り、それぞれが11音節であるからだ。これは問題である。重複するが、

It is im/-pos/-si/-ble to es/-cape from toil

O' the sud/-den and re/-ceive thy spir/-it/-ing-

The flow/-er must drink the na/-ture of the soil

と詩人Keatsは歌う。御覧のように、それぞれが1音節多い。これは字余りである。これらを、全体の10音節に整理・統一しなければならない。9行目は、上記に既に指摘したように、de Selincourt版のように、'scapeとつづり字を省略すれば、

It is im/-pos/-si/-ble to 'scape from toil

と成って、10音節になる。また、10行目のsud/-denは、2音節語であるが、発音記号を見ると、/sʌdn/と発音すると、1音節語になる。即ち、

O' the sudd'n and re/-ceive thy spir/-it/-ing

と成って、10音節に収まる。さらに、11行目の、flow/-erは、2音節語であるが、発音記号は、/flaʊə/と発音するので、1音節語となる。これは、名詞flourと同じ発音であるからだ。

The flower must drink the na/-ture of the soil

と成って、10音節になる。これで、問題の韻律も解消されて、各行はすべて、10音節となる。完璧な14行詩の韻律である。見事な韻律である。

次に、この sonnet の脚韻を調べてみよう。脚韻を見ると、*thine, trees, re/-fine, please, im/-pos/-si/-ble, earth, quell, mirth, toil, spir/-it/-ing, soil, blos/-som/-ing, I, try* というふうに押韻する。全体の脚韻は、/abab/ /cdcd/ /efef/ /ee/ というふうに押韻する。これは、繰り返すが、「イギリス風ソネット」である。問題は、c の押韻と、f の押韻である。つまり、*im/-pos/-si/-ble, quell* と、*spir/-it/-ing, blos/-som/-ing* の押韻である。

まず、前者の押韻であるが、*im/-pos/-si/-ble* のように2音節以上の語でも、最後の音節に強勢があるか、または第2強勢がありえる語は、*quell* と、お互いに男性韻であるが、この場合の、*-ble* は、強勢でも、第2強勢でもないので、*quell* との押韻は不可能である。/bl/ と、/kwel/ という発音の /el/ との押韻は、子音 /l/ は同じであるが、問題の押韻である。両者は類似音であるとも言い難い。類似音に近い押韻である、とも言い難い。ここは、やはり、失敗である、といえよう。

また、後者の押韻であるが、本来の男性行末に、例えば、*spir/-it/-ing* や、*blos/-som/-ing* のように、2弱音節が付加されるまま、弱音節で終わるものを「女性行末」(feminine ending) という。しかし、この場合は、御覧の通り、ともに、*/-ing/* で韻を踏んでいるので、このときは「女性韻」(Feminine rhyme) という。見事な押韻である。

Allott は、この sonnet について、“Written 5 Feb. 1818” という。「1818年2月5日の作詩」である。当時、詩人 Keats は23歳であった。それも、Allott は、“K. wrote the poem for Reynolds after visiting him 4 Feb. 1818.” という。詩人 Keats がこれを作詩する前の、4日に友人 Reynolds を訪ねている。その後で、詩人 Keats は友人 Reynolds のためにこれを書き上げた、と Allott は指摘する。

ここにいう、Reynolds というのは、イギリスの詩人 John Hamilton Reynolds (1794 – 1852) を指す。彼はロンドンの St. Paul’s School に学び、1814年に2巻の詩集を出版。1816年以来の、友人 Keats との付き合いで、

Reynoldsに宛てたKeatsの書簡は多数残っている。Reynoldsは弁護士事務所員となり、後に裁判所の書記を務めながら、たえず詩文を書いたという人物である。詩人Keatsにとって、Reynoldsは一番の親友であったようだ。この親友Reynoldsのために、詩人Keatsはこのsonnetを書き上げたという。

De Selincourtは、“First published 1848.”であるという。詩作から、数えて30年後の「1848年にはじめて出版された」という。これは詩人Keatsの死後、27年のちの出版となる。そして、De Selincourtは、それに続けて、

In the Aldine edition of 1876 Lord Houghton added another version, with no variation of any importance, but with a note appended, “I am enabled by the kindness of Mr. W.A. Longmore, nephew of Mr. J.H. Reynolds, to give an exact transcript of this sonnet as written and given to his mother by the poet, at his father’s house in Little Britain. This poem is dated, in Mrs. Longmore’s hand, 5th Feb. 1818, but it seems to me impossible that it can have been other than an early production and of the especially Spenserian time.”

と説明する。詩人Keatsの死後27年に出版された1848年から、さらに28年後の1876年に、「アルダス活字版のKeats詩集」が出版された。編集したのはHoughton卿である。

上記の、the Aldine editionというのは、1490年頃から1597年までの間に、イタリア北東部の港湾都市Veniceに住む、著名な印刷業者Aldus Manutius (1450 – 1515) 一家が印刷したその板版に、海豚の巻きついた錨の印を用いた古典の集成版のことである。印刷業者Manutiusは、ギリシャ古典文をはじめて印刷し、古典研究に大いに貢献した。その出版物は厳密な校訂と、優れた装丁とで一躍有名になった。彼は在来のfolioに代わって、octavoを一般化して、1501年以降italic字体を広めたという。Folioとは、「2つ折りの紙」をいう。これは4ページ分である。これに対して、octavoとは、「8つ折りの判」をいう。これは16ページ分である。

「男爵Houghtonは、J.H. Reynoldsの甥の、W.A. Longmoreの親切に甘えて、詩人Keatsが、Longmoreの厳父の家で、Longmoreの慈母に捧げて

書き上げたこの話題の sonnet の正確な写しを差し上げることができる、という注釈を添えて、別の改作をその詩集に加えた」と De Selincourt は指摘する。そして「この sonnet の作詩日は、Longmore の慈母の手書きで、1818 年 2 月 5 日と記されている」と De Selincourt が言及する。しかし、「男爵 Houghton は、その制作日を疑問視している」ことを De Selincourt は論及する。「当時 23 歳の作品であるというのは、遅すぎる」というのが男爵 Houghton の疑問点である。その理由は、「詩人 Keats が、取り分け、例の Spenser の活動期に興味を抱いたのは、1818 年よりも早い時期であったことを考え合わせると、恐らくは 1814 年頃作詩の sonnet ではあるまいか」というのが、男爵 Houghton の解釈である。1814 年の初め頃に、詩人 Keats は、「Spenser に倣って」（“Imitation of Spenser”）という短詩を歌い上げているからである。

ここにいう、Houghton 卿というのは、イギリスの文人 Richard Monckton Milnes, 1st Baron Houghton (1809 – 85) を指す。Houghton 卿は、上記の「アルダス活字版の Keats 詩集」を 1876 年に出版する。

念のために、男爵 Houghton が編集出版した『ジョン・キーツ全詩集』（*The Complete Poetical Works of John Keats*, 1912）を参照してみると、「スペンサーへ」（“To Spenser”）と題して、先ず、前書きを添える。

Printed in Life, *Letters and Literary Remains*, and undated. Afterward, when Lord Houghton printed it in the Aldine edition of 1876, he noted that he had seen a transcript given by Keats to Mrs. Longmore, a sister of Reynolds, dated by the recipient, February 5, 1818. But Lord Houghton is confident that the sonnet was written much earlier.

というのがこれである。そして、問題の 14 行詩であるが、

SPENSER! a jealous honourer of thine,

A forester deep in thy midmost trees,

Did last eve ask my promise to refine

Some English that might strive thine ear to please.

But Elfin Poet, 't is impossible



For an inhabitant of wintry earth  
 To rise like Phoebus with a golden quill  
 Fire-wing'd and make a morning in his mirth.  
 It is impossible to escape from toil  
 O' the sudden and receive thy spiriting:  
 The flower must drink the nature of the soil  
 Before it can put forth its blossoming:  
 Be with me in the summer days, and I  
 Will for thine honour and his pleasure try.

と歌う。Allott 版のそれと比べてみると、Houghton 版によると、1 行目の、SPENSER はすべて大文字である。これは、絵画的なイメージを高める効果がある。また、次の不定冠詞は小文字の a である。普通の言い方で、「世の中のすべての Spenser 崇拝者のうちの一人」であることを歌う。8 行目は、Fire-wing'd と短縮形を使う。その上、10 行目の最後はコロンを用い、12 行目もコロンを使い、そして、13 行目の days のあとに、コンマを使用する。がしかし、さらに、驚いた事に、7 行目の最後は、quill と歌うのだ。Allott 版を見ると、quell である。De Selincourt 版も、quell である。Barnard 版も、quell である。これは重要な相違である。前者の quill は、/kwil/ と発音する。これは、5 行目の、im/-pos/-si/-ble と押韻するための、苦汁の選択によるものなのか、は定かではない。

内容が大いに相違するのも、面白い。名詞 quell は、古語で、「殺戮」「鎮圧力」という意味である。それに対して、名詞 quill は、「(鳥の) 羽」特に、「尾羽、風切羽」を意味する。この相違に関しては、詳しく後述したい。

それはさておき、De Selincourt は、Houghton 卿が問題を提示した、この sonnet の制作年月日に対して、

The tone of the poem seems at first sight to bear out what Lord  
 Houghton says, and accordingly he has been followed by Mr. Forman  
 and other editors. But they are probably mistaken.

と論破する。出だしは丁寧な、De Selincourt は、「この詩を音読してみる

と、その語調は、初めは、Houghton 卿がいわれることを裏付けしているように思われる」と注意深く言及する。そして、「Houghton 卿説は、Forman 説や、他の編集者たちの説をそのまま受け入れたものである」と論及する。「したがって、Houghton 卿説も、Forman 説も、他の編集者たちの説も 99% 誤りである」と手厳しく批判する。

ここにいう、Mr. Forman というのは、イギリスの文学者 Harry Buxton Forman (1842 - 1917) を指す。Forman は郵政省官吏 (1860 - 1907) であったが、傍ら、ロマン派詩人たちに甚だしく興味を抱き、1876 年、Percy Bysshe Shelley (1792 - 1822) の『詩作品集』(*Poetical Works*) を出版する。1880 年、Shelley の『散文集』(*Prose Works*)、及び、Keats の『恋人 Fanny Brawne に宛てた書簡集』(*Letters of John Keats to Fanny Brawne*, 1880) や、Keats の『詩作品集その他』(*Poetical Works and Other Writings of John Keats*, 1883) などを出版する。これらが Forman の主要な功績である。その息子 Maurice Buxton Forman が編集した『キーツの書簡集』(*Letters of Keats*) は、1931 年に出版される。後に、増訂版が 1935 年に、その第五版が 1952 年に出版されたことによって、Keats の手紙はほぼ完全のものとなった。その功績は多大なものである。

それはそれとして、De Selincourt は、重複するが、Forman 説や、他の編集者たちの説などを踏まえた Houghton 卿説の疑問点を否定し、さらに、

The form of the sonnet amply corroborates the date which Mrs. Longmore has given, which, apart from internal evidence, there would be no reason for disputing.

と指摘する。De Selincourt は、「例の sonnet の詩型を見る限り、これは間違はなく、Longmore 夫人が提示した、例の制作年月日 (1818 年 2 月 5 日) を裏付けている」という。「例の夫人の手書きに関しては、喩え主観的な根拠があるとしても、そんなに感情的に論駁する理由はなに一つないだろうに」と De Selincourt は、Houghton 卿をたしなめる。筆者もこの De Selincourt 説に同感である。

それでは、De Selincourt が指摘する「イギリス風ソネット」の詩型を用

いた、詩人 Keats 作「スペンサーよ！貴方を敬う一人のねたむ崇拜者」を一語一句に立ち止まり、その意味を探り、その味を調べてみることにしよう。この詩題は、Allott 版によるものである。他に、De Selincourt 版では、“To Spenser”が詩題である。これは、Houghton 卿の題する“To Spenser”と同じである。三人三様の解釈が面白い。

詩人 Keats は先ずこう歌うのだ、

Spenser! A jealous honourer of thine  
A forester deep in thy midmost trees,  
Did last eve ask my promise to refine  
Some English that might strive thine ear to please.

と。不定冠詞 a は、繰り返すが、「世の中のすべての崇拜者のうちの一人」というイメージをもつ。ここでは、御覧のように大文字である。これは、絵画的に、また視覚的に「一人」を強調した言い方である。そして、作者 Keats は、読者に、その一人とは一体誰であるかを自由に想像させるのである。これはまた、新しい情報を提示する、不定冠詞 a である。その一人とは、あくまでも、親友 Reynolds その人を指す。

Thine というのは、古語の詩語で、thou (= you) の所有格である。これは thy と同意であるが、thine は母音で始まる語の前に用いる。また、thine は「なんじの物」(= yours) という意味で、名詞用法にのみ用いる。

念のために、thou というのは、辞書を見ると、古語で、「なんじ」「御身」という意味であるという。これは 2 人称単数主格で、所有格は thy, thine であり、目的格は thee である。複数形は ye である。Thou に伴う動詞は、are, have, shall, will, were がそれぞれ art, hast, shalt, wilt, wert となるが、現在形、過去形に -st または -est の語尾を付ける。現在では神に祈るときや、クエーカー教徒間で、また古雅な散文や詩歌などに用いられる。

1 行目の of thine は、of yours の古雅な表現である。所有格 thy, thine は a, an, no, this などと並べて名詞の前に置けないから of thine の形にして名詞 honourer のあとに置く。例えば、I am an honourer of thine. (「私は御身の一人の崇拜者です。）」というふうに、である。それを、a thine honourer と

はいえない。また別に、thine honourer (= your honourer) というと、「(今話題になっている) その汝の崇拜者」というイメージが濃くなることに、注意しよう。

2行目の thy midmost trees は、your midmost trees の古語である。4行目の thine ear は、your ear の古語である。この場合の所有格は、thy でなく、thine である。Thine は母音で始まる語 (ear) の前に用いる。10行目の thy spiriting は、your spiriting の古語である。そして、最終行の thine honour は、your honour の古語である。

これはまさに、尊敬する先輩詩人 Edmund Spenser に寄せる、友人 Reynolds の「神に祈る」荘厳な気持ちを厳格に表白した詩興である。がしかし、これは、重複するが、詩人 Keats 自身が既に詩人 Spenser からの決別の意図を詩的に吐露したものである、と筆者は強調しておきたい。

それにしても、ここにいう、honour-er という語は厄介である。これは「名誉を授ける人」「礼遇する人」という意味をもつ「中英語」時代の名詞である。Allott は、この a jealous honourer について、“Reynolds” という注釈を添える。そして、Allott は、

See *his Sonnet to a friend* [? Bailey] (1817) 1-2,

We are both lovers of the poets old!

But Milton hath your heart, — and Spenser mine....

と言及する。ここにいう、Bailey とは、詩人 Keats を尊敬する、親友 Benjamin Bailey を指す。「Keats も Bailey もともに、ご存知の古い詩人の熱烈な愛読者である」「Bailey は Milton に感動し、Keats は Spenser に感動する」と歌ったのは、1年前のことである。それが1年も経たないうちに、詩人 Keats の方は既に Spenser と決別して、新しいイギリスの詩歌を求めて、一人さまようのである。松浦暢は『キーツのソネット集』(*Keats' Sonnets*, 1966) の中に、

A jealous honourer of thine

A forester deep in thy midmost tree

「熱烈なあなたの賛美者、

あなたの木の間深くいる森人」

とはJ. H. Reynoldsのことである。

という注釈を添える。松浦のこのtreeは、treesの誤植であろう。思うに、詩人Keatsは、古語honourerを取って用いることによって、親友Reynoldsの変わらない、過去の詩人Spenser崇拝を称えているのではあるまいか。詩人Keatsは、古色蒼然趣味のReynoldsを尊敬するのだと思う。松浦は、

この詩の成立の動機は、キーツがSpenserを愛好しなくなった点をReynoldsが責め、その代わりにSpenser styleの詩を書くようにすすめられたキーツが、それに応えて書いたものとなっている。(See Finney, pp. 362-363)

と、Finney説を紹介する。親友Reynoldsは、詩人Keatsが先輩詩人Spenserから日に日に遠ざかっていくのを残念に思い、Spenserの詩文の魅力を幾度説いたことか。思うに友人Reynoldsの胸を過ったのは、『聖書』の「出エジプト記」の中の、

Honour thy father and thy mother: that thy days may be long upon the land which the LORD thy GOD giveth thee.

という神の言葉であろうかと思われる。これは、ご存知の「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜る地で、あなたが長く生きるためである。」という第二十章第十二節の言葉である。詩人Keatsも、厳肅に、この神の言葉を想起したものと思われる。というわけは、詩人Keatsは、あえて、a jealous honourerと規定するからである。jealousという語は、『聖書』の世界では、(神が)他の神を信じることを許さない、という意味で、a jealous God(「ねたむ神」というふうに、用いられるからである。

これは、「出エジプト記」(“The Second Book of Moses, Called Exodus”)の中の、

Thou shalt not bow down thyself to them, nor serve them: for I the LORD thy God am a jealous God, visiting the iniquity of the fathers upon the children unto the third and fourth generation of them that hate me;

という神の言葉から引用したものである。「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。」(Thou shalt have no other gods before me.) とい

う第二十章第三節の神の言葉を踏まえての、「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及」ほす、という第二十章第五節の神の言葉である。それに続けて、「わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう。」(And shewing mercy unto thousands of them that love me, and keep my commandments.) という。

さらに、「申命記」(“The Fifth Book of Moses, Called Deuteronomy”) の中にも、

(For the LORD thy God is a jealous God among you,) lest the anger of the LORD thy God be kindled against thee, and destroy thee from off the face of the earth.

という、第六章第十五節の神の言葉がある。

思うに、上記の神の言葉を下敷きにして、詩人 Keats は、友人 Reynolds の変わらない先輩詩人 Spenser 崇拜をいたく賛美しながら、一方、イギリスの「詩人のなかの詩人」Spenser から離脱して、新しいイギリスの詩壇を目指し、斬新な詩人として船出する Keats 自身をここに夢見るのではあるまいか。これが筆者の解釈である。

松浦は、重複するが、

内容的にいて、しかし、この詩は Spenser 讃美の詩ではなく、むしろ Spenser 脱皮の詩である。いや換言すれば Spenser に代表される Hunt 的世界、空虚なロマンスや美的なものだけに陶醉していた唯美主義的文学に対する訣別の意志表示であり、また、名前こそ、出ていないが、より現実的、人生的、哲学的な文学への憧れ、……つまり、Shakespeare に代表される詩と人生と真向に取組んだ、より真摯な詩的世界の希求が、このソネットには濃厚にある。

と論述する。ここにいう、James Henry Leigh Hunt (1784 - 1859) というのは、イギリスの評論家で詩人である。イギリスの社会改革者としての Hunt は、獄中にありながら、社会百般の事を論じる雑誌 *The Examiner* (1808 - 81) 紙上を通して、大いに John Keats や John Hamilton Reynolds や、Percy Bysshe

Shelley (1792 - 1822) の真価を世に紹介した。この、松浦の前半の論断は、頷けるものであるが、しかし、「つまり」以下の後半の指摘は、同感しかねるものである。

さらに、松浦はそれに続けて、

簡潔に言えば、Spenser から Shakespeare への転向、「驚異と感覚の時代」から「内省と思索の時代」への詩人の移向を如実に示すソネットといえよう。

と論破する。「Spenser から Shakespeare への転向」という松浦説は一つの解釈である。面白い。がしかし、筆者は別の解釈を持つ。それは既に上記に指摘しておいたように、詩人 Keats が、当時のイギリスのロマン派画家 Benjamin Robert Haydon (1786 - 1846) の強烈な印象を経て、「初期の地中海文明 (アルカディア)」への憧れに移行する、というのが筆者の解釈である。つまり、最終的には、詩人 Keats が辿り着いた、あの名作「ギリシャの壺のオード」(“Ode on a Grecian Urn,” 1891) の世界である。そこに、詩人 Keats は、いみじくも、「聞こえる音楽はすばらしい、しかし、沈黙の音楽はもっとすばらしい」(Heard melodies are sweet, but those unheard / Are sweeter;) と歌い上げているではないか。

思うに、「聞こえる音楽」という前者は即ち Spenser の世界であり、また Hunt の世界である。また「沈黙の音楽」という後者は、後の詩人 Keats がイギリスの詩壇の頂上に登り詰めた、斬新な詩人 Keats の独自の詩境の極致である。これが筆者の解釈である。

なにはともあれ、詩人 Keats は、厳格に、

スペンサーよ！貴方を敬う一人のねたむ崇拜者

とでも歌うのか。早稲田大学名誉教授出口保夫訳を見ると、「スペンサーよ！あなたをひたむきに賛美する者」と読む。松浦は、「熱烈なあなたの賛美者」と読む。松浦も、出口訳にも、筆者が上記に既に指摘しておいた、形容詞 jealous に関する『聖書』の神の言葉の裏付けやイメージのないのが、非常に残念である。

さらに、松浦もそうであるが、出口訳の「あなた」というのは、「彼方」

から転じた言い方で、これは (1) 第三者を敬って指す語であるという。また (2) 近世以後では、目上や同輩である相手を敬って指す語であるが、しかし、さらに (3) 現今は、その「敬愛」の度合いが減じているという。出口訳の「あなた」は、勿論、(3) の「敬愛」の減じた度合いの「あなた」であるのでは、困る。というのは、*Thou is an old-fashioned, poetic, or religious word for 'you' when you are talking to only one person.* という英語感覚を有する語であるからである。

*Thou* という語を歴史的に眺めてみると、「古英語」では、第二人称単数として普通に用いられていた。それが、「中英語」に至って、目上の人に対して *ye, you* などの複数形を用いるようになり、後代に至って対等の人に対しても *ye, you* などを用いるようになったが、目下の人に対しては *thou, thee* などの単数形も長い間用いられていたという。今では神、キリストに呼びかける時、または詩歌、高尚な散文、クエーカー教徒間などに用いられる語 *thou* であるという。

是非とも、*thou* の有する、このような「古語」で「詩語」で「宗教語」であるという重厚なイメージを明示したいものである。がしかし、この語感を日本語に移す場合、厄介である。重複するが、辞書を見ると、「汝」とか、「御身」とか、「そなた」、「あなた」という訳があるからだ。

念のために、「御身」は名詞で、「相手の体をうやまっていう語」であるという。例えば、「御身ご大切に」というふうに、である。またこれは、「敬意を含んだ対称の人称代名詞で、あなた、きみ、おみ」というようである。例えば、「御身にうけさせられた」というふうに、である。御身は、「おんみ」、「おみ」ともいう。「汝」は、文語の第二人称代名詞で、「同輩以下の相手を指す語」であるという。これは「なむち」から転じた語であるという。例えば、「親無しに汝なりけめや」とか、「汝らよくもてこずなり」というふうに使われる。汝は、「なれ」、「なんじ」ともいう。「そなた」は、代名詞で、「目下の相手に用いる」という。古くは丁寧な言い方だったが、後、敬意を失ったという。例えば、「そなたの嘆きはもっともじゃ」というふうに使われる。「そなた様」というと、「そなた」より敬意のある言い方で、主



として女性が男性に対して用いるという。

これらを思うに、ここはやはり、「あなた」を漢字にして「貴方」と歌いたい。思うに、詩人 Keats は、

スペンサーよ！貴方を敬う一人のねたむ崇拜者  
と厳肅に歌うのではないか。「貴方」の代わりに、「御身」でもよい。Jealous という語は、元俗ラテン語で、*zelosus* から派生した語である。これは、後期ラテン語の、*zelus* 「熱意」(*zeal*) という原義を有するという。これは元ギリシャ語の、*zelos* (*emulation* 「張り合うこと」) から借入したラテン語である。このように、これは元ギリシャ語から借入して、古期フランス語の、*gelos* (フランス語 *jaloux*) を経て、1200 年以前？にイギリスに移入された形容詞 *jealous* であるという。

*Zealous* という語は、中期ラテン語の、*zelos-us* から借入した語で、1537 年にイギリスに移入されたという。このように、*jealous*, *zealous* という二重語が誕生したことになる。面白いが、厄介だ。というのは、両者とも「深く心を注いだ」という語感を有するからである。出口訳の「ひたむきに」は、どちらかというに、後者の *zealous* をイメージする意味であろう。また松浦の「熱烈な」という読みも、後者の *zealous* を明示する意味であろう。詩人 Keats は、それに続けて、

A forester deep in thy midmost trees,  
と歌い定める。松浦はこれを「あなたの木の間深くいる森人」と読む。出口訳を見ると、「あなたの森なす木々のただなかに 深く住みこんでいる番人は」と読む。Allott 説によると、

2 forester] An allusion to Reynolds's Robin Hood sonnets. See headnote to *Robin Hood* (p. 301 above).

という注釈が添えられている。ここにいう、Reynolds が歌う Robin Hood のソネット群というのは、Allott 説によると、

Reynolds's sonnets were *The trees in Sherwood Forest are old and good and With coat of Lincoln green and mantle too.*

という 2 篇のソネットであるという。Allott は、2 行目の forester について、

詩人 Keats が上記の Reynolds 作 Robin Hood の 2 篇のソネットをそれとなく言及しているのでは、と指摘する。

Robin Hood というのは、ご存知の、イギリスの伝説に登場する 12 世紀頃の英雄である。1160 年から 1247 年頃に、実際に生存していたといわれる伝説的人物である。Robin Hood の実蹟は、歴史家 Andrew of Wyntoun (? 1350 - ? 1420) の、*Chronicle of Scotland* (c. 1420) や、また、*Litell Geste of Robyn Hooode* (c. 1495)、それに、*True Tale of Robin Hood* (1632) などの作品に見られるが、しかし、歴史的根拠は頗る薄弱であるという。

ここにいう、Wyntoun とは、スコットランドの歴史家である。彼は St. Serf's Inch の修道院長で、世界太初から 1406 年の James 1 世即位までの歴史書を書き上げた人物である。それは、1795 年に出版された、韻文のスコットランド史 *The Orygynale Cronykil* である。この歴史書の中に、Macbeth や Malcolm や Macduff などと、魔女の伝説記録などが記載されていることは有名である。

ここにいう、Macbeth (? - 1057) というのは、ゲール語の、*macbeth* から借入した語で、son of life という原義を有するという。マクベスはスコットランド王 (1040 - 57) である。イギリスの劇作家 William Shakespeare 作『マクベス』(*Macbeth*, 1606) が、四大悲劇の一つとして話題作品である。主人公である將軍 Macbeth が、魔女の予言を信じ野心的な Macbeth 夫人に唆されて、スコットランド王 Duncan を殺害して王位につくが、しかし、王党軍の報復を受けて倒れる、という悲劇史である。

また、Malcolm というのは、ゲール語の、*Maelclm* から借入した語である。これは古代ゲール語の、*mael Coluim* から発達した語で、servant of St. Columba という原義を有するという。これが、*mael* (bald) + *Coluim* (of St. Columba) から派生した語であるという。このように、Celtic servants は頭を剃っていたという。Columba (521 ? - 597) とは、アイルランドの宣教師であって、スコットランドに伝道した僧である。彼はスコットランドの西方、Strathclyde 州 Inner Hebrides 諸島中の小島 Iona 島に修道院を建てたという。ここが、その昔、ケルト教会の中心地であった。Macduff という

のは、Shakespeare 作『マクベス』の中に登場する人物である。スコットランドの貴族で、Duncan 王の遺子 Malcolm を助けて Macbeth を討つ。

それはそれとして、伝説上の Robin Hood の生国は、イングランド北東部の旧州 Yorkshire とも、またイングランド北西部の旧州 Cumberland ともいわれるが、最近の研究によると、彼は本名を Robert Fitz-Ooth といい、イングランド中部の州 Nottinghamshire の Locksley (?) の生まれであるという。彼はイングランド中東部の旧州 Huntingdonshire の Earl of Huntingdon であったが、故あって、国法に触れて、outlaw となり、その後 Sherwood の森林に本拠をかまえ、Little John, Friar Tuck, William Scathelocke, Allena-Dale などの手下を率いて、義賊となって神出鬼没の活躍を続けたという。

ここにいう、outlaw というのは、当時の法律の保護を奪われた人のことで、当時、outlaw を殺しても罪にならなかったという。また、Sherwood というのは、古英語で、Sciryuda といい、wood belonging to the shire という原義を有するという。この Sherwood Forest について、Blue Guide によると、

Sherwood Forest, an ancient demesne of the Crown, once occupied (roughly) the whole W. part of Nottinghamshire, and still covers an area fully 20m. long and 5-10m. wide. It was largely disafforested towards the close of the 18C, and its outlying parts have been spoiled in recent years by the eastward development of the Nottinghamshire coalfield. Certain (diminishing) tracts of lovely woodland in the N. part have, however, been preserved through their inclusion in the so-called 'DUKERIES', made up of the great parks of Welbeck (formerly Duke of Portland), Clumber (N.T., recently Duke of Newcastle), Worksop (formerly Duke of Norfolk), and Thoresby (once Duke of Kingston), though these also are threatened with industrial invasion. The parks of Worksop and Welbeck and also that of Rufford are closed to the public, but those of Clumber and Thoresby are accessible; and within these and among the venerable oaks of Birklands and Bilhaugh, near by, are some of the noblest survivors of the ancient British forests.

と案内する。長い引用文であるが、お許しを乞う。シャーウッドの森林は、

イングランド中北部の州 Nottinghamshire の西部、Derby に近い、200 平方マイルに跨る、昔の王室御料林である。それが、森林法の制約を解いて、一般の原野となる。それが公爵の私有地となる。そして、炭田の開発に伴うとともに、18 世紀末の濫伐によって、一部を残して消滅したという。その一部が今に伝える、原始林イギリスの森林である。そして、Blue Guide はそれに続けて、

Sherwood Forest is inseparably connected with the picturesque exploits of Robin Hood and his Merry Men, which may or may not rest on a basis of fact.

と説明する。シャーウッドの森は、Robin Hood やその仲間たちの、迫真力に富む英雄的な功績を称える森である、という。

しかし、Robin Hood は、イングランド北東部の旧州 Yorkshire に住む、一人の婦人修道士の背信行為のために、非業の死を遂げたと伝えられている。古来、イギリス人から最も愛されている伝説の人物 Robin Hood であり、彼を主題としたバラッドは頗る多い（これは、研究社版『英米文学辞典』を基底としたものである）。

思うに詩人 Keats は、この「シャーウッドの森」に活躍する正義の味方 Robin Hood に託して、友人 Reynolds を、

A forester deep in thy midmost trees,

と歌うのである。Thy というのは、thou の所有格である。これは、勿論、先輩詩人 Spenser を指す。A forester というのは、Cobuild 版をみると、is a person whose job is to look after the trees in a forest and to plant new ones. と説明する。この説明を踏まえて、思うに、詩人 Keats は、先輩詩人 Spenser の詩歌の系列に立つ、一人の後継者であり保護者としての、友人 Reynolds を高らかに、

貴方の詩歌の森の内奥にすむ一人の保護者

と歌うのではあるまいか。A forest というのは、Cobuild 版によると、is a large area where trees grow close together. と説明する。詩人 Keats は、trees に託して、密集して立ち並ぶ樹木の一本一本は、正に先輩詩人 Spenser を敬

う崇拜者一人一人を明示するのも、また斬新な着想である。がしかし、一方、詩人 Keats は、この「下生えの生い茂った自然のままの広大な森林」を意味する forest の原始林のイメージを払拭し、新しいイギリスのロマン派の詩壇を確立しようと、熱望するのも、逞しい限りである。ここにいう、a forester というのは、1 行目の a jealous honourer と同様に、繰り返すが、親友 Reynolds その人をさす。

そして、詩人 Keats はそれに続けて、

Did last eve ask my promise to refine

Some English that might strive thine ear to please.

と歌う。動詞は、ask である。助動詞 did を用いて、一般動詞 ask を強調する。例えば、I always did say so. (「確かに私はいつもそうっていました。）」というふうに、である。主語は、勿論、an honourer であり、また a forester その人である。つまり、親友 Reynolds をさす。思うに、詩人 Keats は、「彼は是非に僕に約束を求めた」と歌うのだろう。どのような約束かということ、それは「英語を高尚優雅にする」という約束である。これは、恐らくは、先輩詩人 Spenser の、あの「豊醇瑰麗な形象の絵画美」と「韻律の陶醉忘我的音楽美」のイメージを踏まえた、「英語にみがきをかける」こと、「英語を上品にする」ことを明示する約束であるのに相違ない。

動詞 refine というのは、Cobuild 版によると、When a substance is refined, it is made pure by having all other substances removed from it. と説明する。思うに、不純なものを取り除いて、英語を純粋にすることを心がけて欲しい、というのが友人 Reynolds の懇願であると、詩人 Keats が歌うのだろう。

ここにいう、some English の some というのは、鬼塚幹彦説によると、“或る”ものが“在る”という意味である。前者の“或る”は、ほかしている、という。後者の“在る”は、存在を意味するという。面白い。つまり、親友 Reynolds が、絵画美と音楽美の両面から見て、詩人 Keats に、「中には上品でない英語もある」から、と説諭するのだろう。

しかも、詩人 Keats は、それを踏まえて、「貴方の聴覚を楽しませようと努力してもよい」と歌うのではないか。この thine ear の thine は、thou の

所有格である。これは your の古語・詩語で、先輩詩人 Spenser をさす。また、動詞 strive は、Cobuild 版によると、If you strive to do something or strive for something, you make a great effort to do it or get it. と説明する。これは、a great effort とあるから、ただの「努力する」ではなく、「奮闘努力する」というイメージを有するようだ。助動詞 might は、may の過去時制である。これは、時制の一致による might である。これはまた、あとに意思動詞 strive が添えられていることを思うに、推量ではなく、許可を意味する助動詞であろう。「奮闘努力してもよい」と歌うのだろう。Last eve の eve は、evening の詩語である。思うに、詩人 Keats は、

貴方の音感を楽しませるために是非奮闘努力して

英語が優雅になるようにと昨夜僕に約束を求めた。

と歌うのではないか。詩人 Keats が歌う、thine ear の ear は、ears ではなく、ear である。これは、Cobuild 版によると、If you have an ear for music or language, you are able to hear its sounds accurately and to interpret them or reproduce them well. と説明する。この ear に託して、詩人 Keats は、なによりも、英語の音を正確に聞き分ける力を明示するのだろう。それは、音感と言い換えても良い。また、please という動詞は、Cobuild 版によると、If someone or something pleases you, they make you feel happy and satisfied. と説明する。

出口訳を見ると、「昨夜 あなたの耳を愉しませるために努力すべく 英語を / 少しでも美しいものにしようと わたしに約束をもとめました。」と読む。出口は、To please thine ear を、「あなたの耳を愉しませるために」と読む。念のために、「愉」という語は、「うつす」という意味をもつ。「気分をうつしかえる」ことから、「こころよい」ことを意味するという。別に、「楽」という語は、(1)「糸 (いと) と木と」から成り、「弦楽器」の意味を示すという。(2)「楽」の原形で、「白は親指の形」を示し、「親指のつめ」で、「弦を傳 (うつ)」の意味を表し、また「ガクの原音ハク (搏)」を示すという。「音楽を奏する」意味から、「たのしむ」という意味となったという。筆者は、「貴方の音感を楽しませるために」と読みたい。

ここにいう、「僕に約束を求めた」という、did askの主語は、無論、1行目のa honourerであり、また、2行目のa foresterその人である。つまり、親友Reynoldsその人である。

スペンサーよ！貴方を敬う一人のねたむ崇拜者で、  
貴方の詩歌の大森林の内奥にすむ一人の保護者が、  
貴方の音感を楽しませるために是非奮闘努力して

一部の英語を優雅にするという約束を昨夜僕に求めた。

と厳粛に歌い上げるのだらう。これが、「最初の4行」(the First Quatrain)の世界である。これは、漢詩の「起承転結」の「起」の世界である。いわゆる、先輩詩人Edmund Spenserのあの「豊醇華麗なる絵画美」と、あの「人を陶醉境に誘う音楽美」とを称える友人Reynoldsの、Keatsを思う暖かい友情を称える詩興であり、また「詩人のなかの詩人」(the poets' poet)としてのSpenserに託して、親友Reynoldsの、詩人Keatsに寄せる篤い願望を切に明示する詩境である。これは、見事な歌い起こしである。

そして、詩人Keatsはそれに続けて、厳格に、

But, Elfin Poet, 'tis impossible

For an inhabitant of wintry earth

To rise like Phoebus with a golden quell

Fire-winged and make a morning in his mirth.

と歌う。ここにいう、Elfin は、(1)elfの形容詞である。Elfというのは、Cobuild版によると、In fairy stories, elves are small magical beings who play tricks on people.と説明する。これは、「一寸法師で、恐ろしい魔力をもち、人間に益と害を与え、子供のすり替えなどをすると信じられたもの」であるという。Elfは、体の小さな美しい妖精で、しばしば隊を作って森や丘や荒野に住むと想像されているという。

形容詞 elfin は、例えば、Cobuild版によると、If you describe someone as elfin, you think that they are attractive because they are small and have delicate features.と説明する。

詩人Spenserは、「魅力のある (attractive) 詩人」である、という意味で、

“Elfin Poet”と名づけられたようである。また、elfinは、(2)名詞として、古語で、「いたずら小僧」「小人」という意味をもつ。Elfinは、重複するが、先輩詩人Edmund Spenserを意味する用語である。

松浦は、このElfin Poetについて、「妖精の詩人（うたびと）よ」と読み、すなわち「= Edmund Spenser」であると読む。筆者も同感である。Edmund Spenserといえば、即ちElfin Poetその人であり、またElfin Poetといえば、無論Edmund Spenserその人を明示する用語である。そして、松浦は、

ここでキーツは、中世的ロマンスの作者をElfin Poetとよび、人界の‘toil’〈苦悩〉を忌避する態度を批判し、詩という芸術の花を咲かせるには‘the nature of the soil’〈大地の精〉を、味得する必要があるのではないかと述べている。

と指摘する。「人の世の苦悩を糧として、詩という芸術の花を咲かせよ」という。これには、筆者も同感であるが、しかし、これが直接、William Shakespeareに向かう、という松浦説はいかかなものであろうか。

Allottは、このElfin Poetについて、

[Elfin Poet] Poet of Elfin or Fairy land. The phrase ‘Elfin knight’ occurs frequently in *The Faerie Queene*.

と論及する。Edmund Spenserを命名して、「妖精の詩人」(“Elfin Poet”)という。その理由は、(1)Allottによると、Spenserの傑作『妖精の女王』(*the Faerie Queene*)にしばしば登場する「妖精の騎士」(“Elfin knight”)に因んだ呼び名であるという。それに対して、(2)松浦は、詩人Keatsの言葉を踏まえて、中世的ロマンスの作者Edmund Spenserであるが故に、そう呼ぶのだという。

イギリスの教育者Ebenezer Cobham Brewer (1810 – 97) は、『名句と寓話辞典』(*The Dictionary of Phrase and Fable*)の中に、elfについて、

Properly, a mountain fay, but more loosely applied to those airy creatures that dance on the grass or sit in the leaves of trees and delight in the full moon.



と紹介する。ここにいう、fay というのは、「おとぎ話の妖精」「小仙女」(fairy) の文語古語である。「本当の意味で、elf は山に住む妖精であるが、しかし、彼らはいつの間にか、漠然と、草原で踊ったり、樹木の木の葉に腰を下ろしたり、満月に浴して大いに喜んだりするという身軽な妖精として適用される」ようになったという。そして、さらに、Brewer は、

They have fair golden hair, sweet musical voices, and magic harps. They have a king and queen, marry and are given in marriage.

であると指摘する。Elves は、「美しい金髪を持ち、甘美な美声を持ち、人の心を奪うような豎琴を奏でる」といい、「彼らには王がいて后がいて、結婚し婿となり嫁となる」という。それに続けて、Brewer は、

They impersonate the shimmering of the air, the felt but indefinable melody of Nature, and all the little prettinesses which a lover of the country sees, or thinks he sees, in hill and dale, copse and meadow, grass and tree, river and moonlight.

と説明する。Elves は、「丘や谷、柴山や牧草地、草や樹、川や月光などにすみ、ご存知の空気の微光を具現し、ご存知の切実に思うが明瞭に示し得ない『自然』の美しい調べをも具現し、田園の恋人がいつも目にし、あるいは目にするものをいつも考えている、ご存知の可愛い花々などをもすべて具現する」という。そして、Brewer は、その後に続けて、興味深いことに、Edmund Spenser を登場させて、

Spenser says that Prome'theus called the man he made "Elfe," who found a maid in the garden of Ado'nis, whom he called "Fay," of "whom all Fayres spring."

と言及する。「Spenser 曰く、Prome'theus が粘土から人間を作り、「Elfe」と名づけた」という。「"Elfe" は、Ado'nis の庭で、一人の乙女を見つけて、彼女を"Fay" (妖精) と名づけた」という。「妖精"Fay" が地上のすべての妖精を生む」という。この Spenser の言葉を踏まえて、後日、詩人 Edmund Spenser は「妖精の詩人」(Elfin Poet) といわれるようになった、と筆者は思う。

ここにいう、Prometheusについて、Brewerは、

Prometheus made men of clay, and stole fire heaven to animate them. For this he was chained by Zeus to mount Caucasus, where an eagle preyed on his liver daily. The word means Forethought, and one of his brothers was Epimetheus or Afterthought.

と説明する。Prometheusは『ギリシャ神話』に登場する、「粘土で人間を作り、天上から火を盗んで来て、その土人形に生命を与え、人類を創造した」という神である。「そのために、Zeusの怒りに触れて、Caucasus山の岩に縛られ、日ごとに鷲に肝臓を食われた」という。「Prometheusという語の意味は、先見、であり、彼の兄弟の一人がEpimetheusといい、追想、という意味の語である」というのは、面白い。

因みに、ギリシャ神話のZeusという神は、ギリシャの北部、ThessalyとMacedoniaとの境の連山の東端にある高峰Olympus山の神々の主神で、ローマ神話のJupiterにあたる神である。Caucasusという山は、黒海とカスピ海との間にある、ロシアの一地方のCaucasiaにある山脈である。Mt. Elbrusは、標高5,642メートルで、ヨーロッパでの最高峰である。このCaucasus山脈を境にして、ヨーロッパ側Ciscaucasiaとアジア側Transcaucasiaとに分かれるという。

上記の、Brewerの説明文の中の、Adonisについて、Brewerは、

A beautiful boy. The allusion is to Adonis, who was beloved by Venus, and was killed by a bear while hunting.

と指摘する。「美貌の少年で、愛と美の女神Venusに愛され、狩りの途中、熊に襲われて亡くなった」という。Venusは『ローマ神話』に登場する、春・花園・豊饒の女神である。後に、『ギリシャ神話』の愛と美の女神Aphroditeと同一視されるようになった。

さらに、Brewerはそれに続けて、

The flower called Adonis is blood-red, and, according to fable, sprang from the blood of the gored hunter (Pheasant's-eye).

と紹介する。金鳳花科の福寿草属(Adonis)の植物の総称「福寿草という花

は血のように真っ赤である。それは、寓話によると、傷から流れ出た血だらけの狩人（雉の目）の、その血から発芽した花である」という。

また、上記の Brewer の説明文中的、“in the garden of Adonis” については、Brewer は、

A garden of Adonis: a worthless toy; a very perishable good. The allusion is to the fennel and lettuce jars of the ancient Greeks, called “Adonis garden,” because these herbs were planted in them for the annual festival of the young huntsman, and thrown away the next morning.

と解説する。「アドーニスの庭」とは、「価値のないもの」という意味であり、「非常に滅びやすい善」であるという意味である。これは、「古代ギリシャ人的精神の人」をそれとなく明示し、それが「例のウイキョウの花や秋の野芥子の花」を暗示するという。「これらの薬草が、ご存知の少年猟師 (= Adonis) の例年の収穫祭のために植えられ、植えられた翌朝には廃棄されるという理由で、アドーニスの庭といわれている」という。

ここにいう、fennel というのは、ヨーロッパ地中海沿岸に産し、薬用や香香料に供するセリ科の植物ウイキョウ (*Foeniculum vulgare*) である。このウイキョウの実 (fennel seed) から、芳香油を採る。また、lettuce というのは、菊科アキノノゲシ属 (*Lactuca*) の植物の総称のアキノノゲシである。この両者の植物は、古代ギリシャ人が好む植物である。然し、ウイキョウにしろ、アキノノゲシにしろ、非常にはやく育ち、8日間の世話をうけると、すぐに傷みだす。腐敗したものは海に投下されるために、別名、「短命な花の庭」(a garden of short-lived flowers) といわれている。これは、無論、Adonis のイメージを重ねた見方である。

興味深いことに、これは、旧約聖書の「イザヤ書」(“The Book of the Prophet Isaian”) の中に、

11. In the day shalt thou make thy plant to grow, and in the morning shalt thou make thy seed to flourish; but the harvest shall be a heap in the day of grief and of desperate sorrow.

12. Woe to the multitude of many people, which make a noise like the noise

of the seas; and to the rushing of nations, that make a rushing like the rushing of mighty waters!

という、第十七章第十一節と第十二節の神の言葉がある。「その植えた日にこれを成長させ、そのまいた朝にこれを花咲かせても、その収穫は悲しみと、いやしがたい苦しみの日にとび去る」「ああ、多くの民はなりどよめく、海のなりどよめくように、彼らはなりどよめく。ああ、もろもろの国はなりとどろく、大水のなりとどろくように、彼らはなりとどろく。」という神の言葉がすべての「庭」の原点であるようだ。

なにはともあれ、重複するが、神 Prome'theus が土から人間を作り、彼を“Elfe”と命名した。“Elfe”は、Ado'nis の庭で、一人の乙女を見つけた。彼女を“Fay”と命名した。子孫が栄えたという話は、旧約聖書の「創世記」(“The First Book of Moses, Called Genesis”)の中の、「天地創造」の由来を想起させるではないか。殊の外、

26. And God said, “Let us make man in own image, after our likeness: . . .

27. So God created man in his own image, in the image of God created he him; male and female created he them.

これは、第一章第二十六節と第二十七節の神の言葉である。そして、想起するのは、

7. And the Lord God formed man of the dust of the ground, and breathed into his nostrils the breath of life; and man became a living soul.

8. And the Lord God planted a garden eastward in Eden; and there he put the man whom he had formed.

という第二章第七節と第八節の神の言葉である。さらに、思い出すのは、

18. And the Lord God said, it is not good that the man should be alone; I will make him an help meet for him.

20. . . .: but for Adam there was not found an help meet for him.

21. And the Lord God caused a deep sleep to fall upon Adam, and he sleep: and he took one of his ribs, and closed up the flesh instead thereof;

22. And the rib, which the Lord God had taken from man, made he a woman, and brought her unto the man.

23. And Adam said, This is now bone of my bones, and flesh of my flesh: she shall be called Woman, because she was taken out of Man.

という第十八節と、第二十節以降の神の言葉である。これらは、ご存知の、あの「アダムとイヴ」の生誕に関する、神の言葉である。そして、

20. And Adam called his wife's name Eve; because she was the mother of all living.

という第三章第二十節の神の言葉を想起する。その後、

23. Therefore the Lord God sent him forth from the garden of Eden, to till the ground from whence he was taken.

24. So he drove out the man;....

という第二十三節以降の神の言葉の示す通り、神の意志に反した「二人が楽園を追われる」というのである。

このような神の言葉を下敷きにして見ると、上記に既に指摘した「詩人 Spenser は即ち Elfin Poet」であると同時に、この「妖精の国の詩人 Spenser」は「神の創造した最初の人間 Adam」の由来にも重なる、と見るのはただ筆者のみであろうか。楽園の Adam の由来を踏まえてみると、「妖精の国の詩人 Spenser」の実態もより明らかとなるであろう。思うに、神の戒めに従わずに知恵の実を味わったために、Adam は妻 Eve とともに、エデンの園から追放された最初の罪びとである。これに対して救世主キリストが第二の Adam であるということを思うに、「妖精の国の詩人 Spenser」もまた、第三の Adam であるとするれば、詩人 Keats もまた、第四の Adam をここに夢見ているのではあるまいか。それとも、詩人 Keats は、「妖精の国の詩人 Spenser」と決別して、第二の救世主キリストを目指しているのかも知れない。

なにはともあれ、the Elfin Poet（「妖精の詩人」）といえ、イギリスの「詩人のなかの詩人」Edmund Spenserをいう。The sweet Swan of Avon（「エイボンの白鳥」）といえ、ご存知の、William Shakespeareをいう。

The Mantuan Swan (「マントバの白鳥」) といえば、あの、ローマ第一の詩人 Vergil or Virgil (70 – 19b.c.) をいう。

思うに、詩人 Keats は、重複するが、先輩詩人 Edmund Spenser を  
妖精の詩人よ

と感動的に歌うのだろう。そして、詩人 Keats は、「It is impossible for A to do.」  
構文を用いて、繰り返すが、

(But, Elfin Poet), 'tis impossible

For an inhabitant of wintry earth

To rise like Phoebus with a golden quell

と歌い続けるのである。これは、先ず、「A が do することは不可能である」と歌うのか。ここにいう、'tis とは、it is の短縮形である。このように、不定詞 “for... to ~” について、山口俊治は『山口英文法講義の実況中継』(English Grammar 1) の中で、「軽視できない」と強調する。「“for... to ~”」は、「……が~する」「……が~である」というネクサス (nexus) が入る典型的な形である、という。

Impossible という語は、Cobuild 版によると、Something that is impossible cannot be done or cannot happen. という意味の形容詞である。これは「理論上もありえない・絶対にありえない」を意味するという。また、inhabitant という語は、Cobuild 版によると、the inhabitants of a place are the people who live there. という。これは、「(永久的に) ある場所に住む人」という意味である。上記の山口説を踏まえて見ると、思うに、詩人 Keats は、理論上においても、

冬枯の大地の居住者は誰もフォイバスのように

立ち上がることは絶対にありえないことだ。

と声高に歌うのではあるまいか。ここにいう、Phoebus というのは、『ギリシャ神話』に登場する、太陽神 (sun god) としての Apollo のことである。太陽の神フォイバス (Phoebus) が黄金の車に引き具 (Phoebus harnessed to his golden chariot) をつけて東の空にあらわれる。まるで太陽がさんさんと照り始めたようだ。別に、Phoebus Apollo ともいう。Phoebus という語

は、元ギリシャ語の *Phoibos* といい、bright という原義を有するという。これは、詩語で「日輪」とか「太陽（の擬人）」という。この太陽神 Phoebus に対して、月の女神を Phoebe という。これは、Artemis の別名である。

Brewer は、この Phoebus について、

The sun or sun-god. In Greek mythology Apollo is called Phoebus (the sun-god), from the Greek verb *phao* (to shine).

“The rays divine of vernal Phoebus shine.” (Thomson: *Spring*)

と指摘する。ここにいう、Thomson というのは、Scotland の詩人、James Thomson (1700 – 48) である。彼は、1726 年に *Winter* を、翌年 1727 年に *Summer* を、そして 1728 年に *Spring* を出版し、さらに、1730 年に *Autumn* を加えて、詩集 *The Seasons* と題して刊行したので、有名である。Brewer は、この Thomson の「春」の中の 1 行を引用する。「若々しい太陽神の四方に放つ神々しい光は輝く」という、太陽神 Phoebus を紹介するのである。

Brewer は、月の女神 Phoebe について、

The moon, sister of Phoebus.

と言及する。

松浦は、この Phoebe について、

Phoebus [fi:b s] = a name given to Apollo, or the sun. This word expresses the brightness and splendour of that liminary (φωτοβολος). (Lemprière)

“specific image of the poetry-making power” (Evert)

という注釈を添える。出口訳の「フィバス」は、松浦説のように、英語読みを用いた神の名である。Allott は、この like Phoebus...Fire-winged について、

Like Phoebus Apollo whose fiery light dispels the wintry darkness. For K.'earlier use of 'quell' (the power to subdue or destroy) see *Endymion* ii 537 and *n* (p. 185 above),

A sovereign quell is in his waving hands....

という注釈を添える。Allott 説によると、「太陽の神の火のような光は冬枯れの暗闇を追ひ払う」という。そして、Allott は、「詩人 Keats が、quell と

いう語を初期の作品 *Endymion* の中にも使用している」ことを指摘する。それは「王の振る両手には王位の鎮圧力がある」という *quell* である。これは、「鎮圧する力」を意味し、あるいは「破壊する力」を意味する名詞 *quell* であるという。思うに詩人 Keats は

黄金の鎮圧力を有する太陽神フォイバスのように  
と厳格に歌うのだらう。松浦は、また、この、*an inhabitant of wintry earth* を「この冬ざれの地上の人の子」と読み、「つまり現実に根を下ろした詩人のこと」と見るのだが、松浦の指摘する「詩人」とは、一体、誰のことなのか、不明である。詩人 Spenser もまた「この冬ざれの地上の人の子」であり、「現実に根を下ろした詩人」であるからである。詩人 Keats もまた然りだ。詩人で友人の Reynolds もまたそうであるからだ。不定冠詞 *an inhabitant* が意味深い。

詩人 Keats が規定する、*it is impossible for ~ to rise like Phoebus ~*. という不定詞 *to rise* は、Phoebus が太陽神であることを思うに、*The sun rises in the east*. (「太陽は東から昇る。」) というイメージを下敷きにして、「居住者は誰も太陽神 Phoebus のように立ち上がることは絶対にありえないことだ」と読むべきだろう。この場合の *rise* は、文語である。

*Wintry earth* という *wintry* は、*winter* の古語である。これは「冬の」という形容詞である。現在は *winter* という「限定用法の形容詞」を使用する。出口訳を見ると。「この冬ざれの地上の住人」と読む。松浦も、出口もともに、*wintry* を、「冬ざれ」と読む。これは、「冬の荒れさびれた姿」を意味する。与謝蕪村が、この「冬ざれ」という冬の季語をもちいて、

冬ざれや小鳥のあさる韭菰

と詠う一句を想起する。小生は、*wintry* を「冬枯れ」と読む。(1) 冬季に草木の葉が枯れた、そのさびしい眺め、を見る。というのは、『古今和歌集』の「恋」の

冬枯れの野べとわが身を思ひせばもえても春を待たましものを  
という一首を思い出すからである。また「冬枯れ」には、(2) 冬の、寒くして、淋しい様子、に心引かれるからである。『夫木抄』の「冬月」の



冬枯れのすさまじげなる山里に月のすむこそあわれなりけれ  
とか、さらに、『徒然草』の「第十九段」の

さて冬枯れの景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ  
という言の葉を想起するし、詩人 Keats が歌う、この wintry earth に重なるからである。

出口は、この、an inhabitant を、単に「住人」と読むのだが、しかし出口は、詩人 Keats が歌う、It is impossible for an inhabitant of wintry earth to rise....の、for an inhabitant to do を「住人にとっては」と読む。これはいかなものか。筆者は「居住者は誰も立ち上がることが絶対にありえない」と読む。

然し、妖精の国の詩人よ、冬枯れの大地の居住者は

誰も黄金の鎮圧力を有する太陽神フォイバスのように

立ち上がることは絶対にありえないことである

と詩人 Keats は厳粛に歌うのではないか。そして、詩人 Keats はさらに、

Fire-winged and make a morning in his mirth

と歌い定めるのだ。この、fire-winged という語句は厄介である。これは (1) 太陽神 Phoebus を説明するものなのか、それとも (2) a golden quell を説明するものなのか、である。Winged というのは、過去分詞形で、例えば、a winged angel (「翼のある天使」) というふうに、使われる形容詞であるからである。しかし、出口訳を見ると、「黄金の鎮める力と / 火の翼をもち」と読む。

重複するが、Allott 版によると、上記のように、

To rise like Phoebus with a golden quell

Fire-winged and make a morning in his mirth.

と歌う。御覧のように、句読点がないが、しかし、De Selincourt 版によると、

To rise, like Phoebus, with a golden quell,

Fire-wing'd, and make a morning in his mirth.

と歌うのだ。コンマが、4箇所に使われている。さらに、Barnard 版による

と、

To rise like Phoebus with a golden quell,

Fire-winged, and make a morning in his mirth.

と歌う。コンマが2箇所用いられている。このように、それぞれ三人三様の解釈で、複雑至極である。思うに、with a golden quellという前置詞句は、Allott 版と、Barnard 版の示すとおり、太陽神 Phoebus を説明する形容詞句であると思われる。また、fire-winged という過去分詞形は、De Selincourt 版と、Barnard 版の示すように、太陽神 Pheobus を説明する形容詞句であると思われるのだが、これはいかがなものか。つまり、

(1) 黄金の鎮圧力を有した、火の翼のある太陽神フォイバス  
と読むか、それとも、Allott 版の示すように、

(2) 火の翼のある黄金の鎮圧力を有する太陽神フォイバス  
と読むか、である。Allott は、既に上記に紹介したように、詩人 Keats の初期の傑作中の傑作 *Endymion* のなかの 1 行 (A sovereign quell is in his waving hands.) を引用して、この quell に対して、

An archaism for the power or means to destroy, here referring to  
Cupid's bow and arrow.

という注釈を添える。Allott 説によると、「quell という名詞は、破壊する力、あるいは、破壊する手立ての古語」であるという。それは「*Endymion* において、Cupid の弓矢」を指すという。Cupid とは、ご存知の『ローマ神話』に登場する、恋愛の神である。Mars または Mercury と Venus との間にできた子であるという。『ギリシャ神話』の Eros に当たる。別に、Amor ともいう。Cupid は、弓矢を手にした、翼のある裸の美少年で表わされ、その矢に当たった者は恋に落ちるという。この Cupid のイメージを、太陽神 Phoebus に重ねてみると、上記(1)の解釈の方が自然である。しかし、これは余りにも幼稚すぎるイメージである。翼のある Cupid であれば、可愛いのであるが、しかし、翼のある太陽神 Phoebus には、どんなものか。

一方、「翼」(Wing) といえは、authority, power, glory, and protection というイメージがある。特に、想起するのが、Israel under the wings of the

eagle or vulture-god という「ワシ神」や「ハゲワシ神」の翼である。この「ワシ神」や「ハゲワシ神」の翼を、太陽神 Phoebus のそれに重ねてみると、大いに納得できる。

これに合わせて、筆者は、上記の傑作 *Endymion* の 1 行、A sovereign quell is in his waving hands. に注目したい。この、his waving hands が、つまり、火の翼をイメージする、というのが筆者の解釈である。というのは、Hand は、strength, power of God and Providence をイメージするからである。

Allott 版によると、無論、with a golden quell という前置詞句は、太陽神 Phoebus を説明する形容詞句である。問題の、Fire-winged という過去分詞形は、前に句読点があれば自然に、前行の名詞 a quell を説明することになる。「火の翼のある鎮圧力」となり、上記(2)の「火の翼のある黄金の鎮圧力を有する」となる。「翼」即ち「双手」であるというイメージを踏まえてみると、「火の翼」は、夜明けを明示する。また、「太陽神 Phoebus の双手には、夜の暗黒を破壊する力」があることを明示するのだ、と思われる。「五本の指を思い切り広げた手は、太陽」(open hand with fingers widely stretched [= sun-symbol]) を象徴し、「邪眼除けのしぐさで」(protective magic against the evil eye) あるという見方は、面白い。筆者は、やはり、上記(2)の Allott 版の、句読点のない方の歌い方を味わいたい。

興味深いことに、上記に既に指摘しておいたように、Houghton 脚版を見ると、重複するが、

But Elfin Poet, 't is impossible

For an inhabitant of wintry earth

To rise like Phoebus with a golden quill

Fire-wing'd and make a morning in his mirth.

と歌うのである。問題は、with a golden quill の、quill という名詞である。念のために、Cobuild 版を繙いてみると、A quill is a pen made from a bird's feather. / A bird's quills are large, stiff feathers on its wings and tail. と説明する。前者は「羽ペン」という意味であり、後者は「(鳥の翼または尾にある) 強くて丈夫な羽根」「おばね」という意味である。思うに、この名詞

quill は、Houghton 卿版の誤植 (?) であろうか。それとも、Houghton 卿は真面目に、「火の翼のついた黄金の羽ペン [or 強くて丈夫な羽根] を有する太陽神 Phoebus」とでも歌うのだろうか。筆者は、この quill について、この拙文の終わりで再度考察する。

詩人 Keats が歌う、with a golden quell の、gold (en) は「太陽と火」(sun and fire) をイメージし、キリスト教の世界では「神の霊」(divine spirit) を象徴するという。ヘブライでは、「神の不可思議な力」(divine, mystic power) を表わすという。

「翼」はまた、「空気」(air) を表わすという。しかも、「風の神」(attribute of wind-deities) をイメージし、特に、「朝の風」(the morning-air) を象徴するという。旧約聖書の「詩篇」の中に、

If I take the wings of the morning, and dwell in the uttermost parts of the sea;

と明記されている。これは、「聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌」の第百三十九篇第九節の神の言葉である。ここにいう「わたし」とは、ダビデを指す。このダビデの「あけぼのの翼」は、即ち、「朝の風」をイメージするという。「火」(fire) は、「太陽」(the sun) を象徴するという。太陽年において、夏至、冬至、春分、秋分などの重要な節目にはつねに火が焚かれるという。とくに冬至には太陽の再生を援けるべく、火が焚かれ、他の時節でも太陽に正しい軌道を歩ませるために、火が焚かれるという。

このようなイメージを踏まえて、詩人 Keats は、

火の翼のついた黄金の破壊力を有する太陽神フォイバス  
と歌うのだらう。そして、詩人 Keats は

(Fire-winged) and make a morning in his mirth.

と規定する。後半は、It is impossible for an inhabitant of wintry earth to make a morning in his mirth.と歌うのだらう。これは、恐らくは、「冬枯れの大地の居住者は誰も朝が太陽神フォイバスの陽気な騒ぎに浴する状態を作ることとは絶対にありえないことだ」と歌うのではあるまいか。ここは、2箇所のネクサス (nexus) に注意しよう。(1)は2番目の不定詞の“for... to ~”で

あり、(2)は第五文型 (S + V + O + C) の “O + C” の部分に含まれるネクサス(「主語+述語」)である。後者は「make + O + C」の “O + C” の部分に含まれている、ネクサスを先ず精読しよう。「朝が太陽神の陽気な騒ぎに浴する状態を作る」と先ず読もう。In his mirthを「太陽神の浮かれた楽しさ」でもよい。ここにいう前置詞inは、鬼塚幹彦説のように、「杵・縁取り」のイメージを活かそう。「大喜びでない状態」と分ける境界をもった「杵」である。松浦は、この、make a morning in his mirthに関して、「陽気に朝をむかえる」という注釈を添える。松浦は、この代名詞の所有格hisを、恐らく、主語のan inhabitantの所有格である、と誤読しているようだ。これは不可解である。筆者は、太陽神Phoebusの、所有格であると、精読する者であるからだ。

出口訳を見ると、「朝を陽気なものにする / フィバスのように立ち上がることは 不可能です」と読む。出口は等位接続詞andを見落としているのではないか。ここは、重複するが、詩人Keatsは、it is impossible for A to rise like Phoebus . . . and (it is impossible for A) to make a morning in his mirth. という2つの不定詞の構文を使用しているからである。思うに、詩人Keatsは、

然し、妖精の国の詩人よ、冬枯れの大地の居住者は誰も  
火の翼のついた黄金の破壊力の持主太陽神フォイバスの様に  
立ち上がることも、また或る日の朝が太陽神の陽気な騒ぎに  
浴する状態を作ることも絶対にありえないことである。

と声高らかに歌うのではあるまいか。これは、「2番目の4行」(the second quatrain)の世界である。漢詩の「起承転結」の「承」の世界に当たる。ここは、イギリスの「詩人のなかの詩人」Edmund Spenserに対して、後輩詩人Keatsが、恐れ多くも「一筆物申す」世界である。イギリスの詩壇を省みると、昔も今もまだ、太陽神Phoebusのような、神業を有する詩人が登場していないことへの、詩人Keatsの深い反省と大いなる不満を吐露した世界である。実践的にも、また理論的にも、このようなことが絶対にありえないことを詩人Keats自身も実感し、それ故に歯がゆい思いを切実に表白し

ているのは、逞しい限りである。

思うに、詩人 Keats 自身が今後のイギリス詩壇に夢見る詩人像は、太陽神 Phoebus のような詩人である、というのが筆者の解釈である。詩人 Keats は、第二の太陽神 Phoebus になることである。そのためにも、先ず、(1) 火の翼のある黄金の破壊力を有する詩人 Keats でなければならない。そして、(2) イギリスの朝が太陽神 Phoebus の陽気な騒ぎや、浮かれた楽しみに浴する状態を作る詩人 Keats であらねばならない。これが即ち、詩人 Keats 自身の転換点である、というのが筆者の解釈である。さらに、後者(2)の世界は、自然に、詩人 Keats の晩年の傑作中の傑作「ギリシャの壺のオード」(“Ode on a Grecian Urn”)に繋がる世界である、と筆者は強調しておきたい。

ここに詩人 Keats が規定する、a morning (「と或る日の朝」)は重要である。「朝」に纏わるイギリス人のイメージについて、先ず思い出すのは John Milton (1608 - 74) の、

Now morn her rosy steps in th' eastern clime  
Advancing, sowed the earth with orient pearl,  
When Adam waked, so custom'd, for his sleep  
Was airy light, from pure digestion bred,

と歌う「朝とアダムの目覚め」の世界である。これは『失樂園』(*Paradise Lost*)の第五巻(Book V)の歌いだしの、最初の4行の「朝」の世界である。Morn は、morning の「詩語」である。「やがて東の空に曙が薔薇色の歩みをすすめる」というイメージは、「原始時代の幸福」とか、「樂園」を明示するものである。これを踏まえて、詩人 Keats はその影響を受けて、殊の外「朝」に詩的興味を抱き始めたといえるかもしれない。というのは、William Shakespeare は『ヴィーナスとアドーニス』(*Venus and Adonis*)の中で、

Even as the sun with purple-colour'd face  
Had ta'en his last leave of the weeping morn,

と歌うからである。これは歌いだしの、最初の2行の「朝」の景色である。朝は朝でも、「すすり泣く朝」を歌い、しかも、「太陽が露の涙にぬれたオーロラ (= 朝) に別れを告げる」情景である。「曙の女神」とは、ギリシャ

神話に登場する「エオス」(Eos) のことである。これは、ローマ神話の「オーロラ」(Aurora) のことである。

このように、morning は「詩語」として、「暁」(dawn) を意味する。この、Shakespeare の「朝」は、詩人 Keats の求める「朝」ではない。詩人 Keats の求める「朝」は、Milton のそれのように、なによりも「健康な、元氣をもたらす朝」である。詩人 Keats は、晩年の傑作「ハイピリオンの崩壊」(“The Fall of Hyperion”) の、294 行目以下に、

Deep in the shady sadness of a vale,  
Far sunken from the healthy breath of morn,  
Far from the fiery noon and eve's one star.

と歌っているからである。「朝の健康な息吹」は、勿論、「心の富」を明示し、それは、正しく太陽神 Phoebus の喜びを表わす「朝」そのものであるといたい。

詩人 Keats より 79 歳も年上の、先輩詩人 Thomas Gray (1716 - 71) は、「或る田舎の墓畔の哀歌」(“An Elegy Written in a Country Churchyard” 1751) の中で、

The breezy call of incense-breathing morn,  
The swallow twittering from the straw-built shed,  
The cock's shrill clarion, or the echoing horn,  
No more shall rouse them from their lowly bed.

と歌う。これは、第五連の 4 行の「朝」の光景である。そこには、「芳しく息づく朝の微風の呼ぶ声と、ツバメの囀り、それに、クラリオンのような雄鶏の鳴き声」のみが反響する「朝」である。しかし、Gray の「朝」には、太陽神 Phoebus の姿が見えないのは、詩人 Keats にとって、非常に残念な「朝」であると思う。Morning は、中英語 *morwen* に、接尾辞 *-ing* がついたものであるという。これは、evening にならった造語であるという。

それはそれとして、詩人 Keats は、それに続けて、

It is impossible to escape from toil  
O' the sudden and receive thy spiriting—

The flower must drink the nature of the soil

Before it can put forth its blossoming.

と歌う。ここにも、詩人 Keats は不定詞の、“It . . . to ~” 構文を用いるのだ。ご存知のように、この、“It . . . to ~” 構文では、(1) “It . . . for . . . to ~” となる場合と、(2) “It . . . of . . . to ~” となる場合がある。前の「承」の世界に使われた、“It is impossible for an inhabitant of wintry earth to rise like Phoebus . . . and make a morning in his mirth.” という不定詞構文を思い合わせると、この “It is impossible to escape . . .” の構文は、上記 (1) の “It is impossible for an inhabitant of wintry earth . . . to escape . . . and receive thy spiriting —” の場合の不定詞構文ではあるまいか。

ここにも、詩人 Keats は、形容詞 impossible に託して、「理論的にも、絶対にありえないこと」を歌い上げるのだろう。つまり、「冬枯れの大地の居住者は誰も……から逃れることは絶対にありえないことだ」と厳格に歌うのではあるまいか。Toil という名詞は、Cobuild 版によると、Toil is unpleasant work that is very tiring physically. という意味である。思うに、詩人 Keats は、「肉体的に非常に疲れさせる、不快な仕事から逃れることは絶対にありえないことだ」と歌うのだろう。

しかも、詩人 Keats は、O' the sudden と規定する。この、O' というのは、on の短縮形で、on the sudden (= suddenly) という前置詞句である。これは、all of a sudden と同じ意味で、Cobuild 版によると、If something happens all of a sudden, it happens quickly and unexpectedly であるという。副詞 suddenly と同じ意味である。

詩人 Keats は、厳粛に、

不意に骨折り仕事から逃れることは絶対にありえない  
と歌うのだろう。繰り返すが、この不定詞の主語は、無論、「冬枯れの大地の居住者は誰も」である。この escape from toil に関して、Allott は、

[Escape from toil] leave this world *Draft*. K.'s 'toil' was the preparation of *Endymion* for the press. He was still revising *Endymion* ii on 5 Feb. 1818—see his letter of this date to J. Taylor (LI 226) — and did not finish copying out



the poem until c. 14 March 1818 (LI 246). Another reason for K's desertion of Spenser is suggested by his renewed interest in Shakespeare and Milton.

という注釈を添える。Allottは、詩人Keatsの「肉体的に非常に疲れさせる、不快な仕事」(toil)に関して、2つの理由を紹介する。その(1)は、傑作*Endymion*を印刷にまわす準備に追われていることであるという。友人J. Taylorに宛てた手紙の日付、即ち、1818年2月5日は、まだ傑作*Endymion*の二巻を訂正中であったためだという。それが1818年3月14日頃になっても、まだ完全に写し終えることが出来なかった由、という。ここにいうJ. Taylorとは、John Taylorといい、詩人Keatsの親友の一人で、出版社を営む。

理由の(2)は先輩詩人Edmund Spenserへの憧れや尊敬の念を見捨てることであるという。そして詩人Keatsが、イギリス文学の大御所William Shakespeareや、John Miltonに新たなる興味を抱き始めたことであるという。詩人Keatsの転換点は、Edmund Spenserから、William ShakespeareやJohn Miltonへ、というのがAllott説である。松浦も「簡潔にいえばSpenserからShakespeareへの転向」であることを述べているのが、それは、既に上記に指摘しておいた。恩師を裏切り、新しい恩師を見つける、という恩知らずにして難儀な取捨選択の「運命の岐路」に立ち向かう詩人Keatsであるといえまいか。これは、飽く迄も、友人Reynolds側から見たものである。筆者は、既に上記に論及しておいたように、Spenserから「太陽神Phoebus」への転換である、と思う。

このような「運命の岐路」から逃れることは理論的にも不可能である、と詩人Keatsは声高らかに歌い上げるのに違いない。それも、不意に逃れることは絶対にありえないことだ、と歌うのだろう。そして、さらに、詩人Keatsは、and receive thy spiriting—と歌うのだ。ここにいうthyという人称代名詞の所有格は、誰を指すのかが問題である。

1行目の、Spenser! A jealous honourer of thineのthineや、2行目の、A forester deep in thy midmost treesのthyや、そして4行目の、Some English

that might strive thine ear to please の thine などを思い合わせてみると、この10行目の thy は、言うまでもなく、先輩詩人 Spenser その人を指す、と思われる。Spiriting とは、文語で、「精神の働き」とか、「靈感」(inspiration) という意味をもつ名詞である。

思うに詩人 Keats は、厳格に、

不意に運命の岐路から逃れることも、また貴方の靈感を

受け取ることも絶対にありえないことである——

と歌うのか。Receive とは、Cobuild 版によると、When you receive something, you get it after someone gives it to you or sends it to you. と説明する。これは、単に「差し出されたものを受け取る」だけで、「受諾する」という意味はないことに、注意しよう。念のために、類似語の accept とは、If you accept something that you have been offered, you say yes to it or agree to take it. と説明する。これは、「同意のうでで受け入れる」という意味である。

出口訳を見ると、「労苦から急にのがれ あなたの陽気な心を / 受け入れることも 不可能なことです。」と読む。Toil を「労苦」と読み、spiriting を「陽気な心」と読む。出口は、8行目の後半、make a morning in his mirth を「朝を陽気なものにする」と読む。前者の所有格は、thy spiriting であり、後者の所有格は、his mirth である。後者の陽気さは太陽神 Phoebus の陽気さであることは、同感であるが、しかし前者の陽気さは先輩詩人 Spenser の陽気さであると読むのは、どんなものか。

詩人 Keats は、それに続けて、

The flower must drink the nature of the soil

Before it can put forth its blossoming.

と歌い定める。松浦はこの2行に関して、

この二行の解釈について、Blackstone を引用しよう。“He is learning not to discriminate, not to choose: but to accept, as the seed accepts, every fostering influence, every contribution to its growth. He understands that the vigour of the *earthly root* is indispensable to the lifting up of the *golden fruit* (total realization). This is a very great step forward. (*The*

*Consecrated Urn*, p. 365) ....”

と注釈に紹介する。「Blackstone 曰く、Keats の詩人としての修練は相手を  
取捨・選択するためではない。」と松浦がいう。「Blackstone 曰く、種が、す  
べての栄養を摂取し、すべての物質を同化して成長するように、それは、飽  
く迄も、吸収するためである」と松浦がいう。「Blackstone 曰く、大地の根  
源の活力はその黄金の果物の成熟に不可欠であることを Keats はよく心得て  
いる」と松浦が同感する。「Blackstone 曰く、これが前進への正に偉大な一  
歩である」と松浦が同意する。これは、詩人 Keats 側から見ると、頷ける  
が、しかし、先輩詩人 Spenser の靈感をともに受け入れてきた親友 Reynolds  
側から見ると、やはり、詩人 Keats の無責任にして、無慈悲な取捨・選択で  
ある、と筆者は見入る。

思うに詩人 Keats は、切々と、

詩人の花は、見事に開花することがあり得るとしても

その前にその土壌の生命力を吸収しなければならない。

と歌うのだろう。出口訳を見ると、「花は その蕾を咲かせる前に / 自然  
の土の養分を 飲まねばなりません。」と読む。「花が養分を飲む」という  
言い方は可笑しい。普通、「養分を取る」というからである。また、飲とい  
う語は、口をあいた人が、酒だるに向かっている形と、今 (いん) とから成  
る。インの音は「のみくだす」という意味の語源「咽」からきているとい  
う。「酒をのみくだす」意味であるからだ。英語の drink という動詞には、  
ほかに、「〈植物が〉〈液体などを〉吸収する」とか、「吸い上げる」という  
意味がある。

Blossom とは、Cobuild 版によると、Blossom is the flowers that appear  
on a tree before the fruit. と説明する。「実を結ぶ花」を blossom という。  
詩人 Keats はこの名詞 blossoming に託して、必ず、本物の詩人としての実  
を結ぶことを明示しているのは、見事である。

不意に運命の岐路から逃れることも、貴方の靈感を

受け取ることも絶対にありえないことである――

詩人の花は、見事に開花することがあり得るとしても

その前にその土壌の生命力を吸収しなければならない。

と歌うのではあるまいか。これが、「3番目の4行」(the third quatrain)の世界である。漢詩の「起承転結」の「転」の世界である。これは、詩人 Keats の個人的な告白と、言い訳の世界である。反面、「実を結ぶ花 blossoming」を歌い上げるのも、絶妙である。

そして、詩人 Keats は、最後の2行を、

Be with me in the summer days and I

Will for thine honour and his pleasure try.

と歌い収めるのだ。重複するが、De Selincourt 版によると、

Be with me in the summer days, and I

Will for thine honour and his pleasure try.

と歌うのだ。(1)De Selincourt 版や、Houghton 卿版は、ともに、and の前にコンマを用いるが、しかし、(2)Allott 版では、そのコンマが無い。また、Barnard 版にも、そのコンマが無い。これをどう読むか、が問題である。

De Selincourt 版のように、and の前にコンマがあれば、接続詞 and は、〈命令文その他(仮定)のあとで〉「……すれば」、「……とすれば」という意味となる。例えば、Run fast, and you will catch the train. (= if you run fast, you will catch the train.) (「速く走ればその列車に間に合いますよ。') というふうに、である。つまり、詩人 Keats は、

この夏の間中ずうっと僕と一緒に居てくださるならば、

貴方の名誉のために、彼の希望通りに必ず努力します。

と歌い収めるのではあるまいか、というのが De Selincourt 説であり、また Houghton 卿説であると思われる。命令文は、このように接続詞 and の前に、コンマを使うのが普通である。

それに対して、Allott 版や、Barnard 版によると、接続詞 and の前に、コンマが無い。これをどう読むか、である。しかし、思うに、このようにコンマが無くても、Random House 版によると、and は、/ænd/と強く発音して、《命令文などの構文の後で》「そうすれば」という意味で用いられると説明し、そして例えば、Say one more word about it and I'll scream.

(「それについても一言でもいったら私は金切り声を上げますよ。)」というふう  
に、接続詞 and の前に、コンマが使われていない一文を紹介しているの  
である。

命令文は英語における唯一の例外ケースとして、動詞で始まる。命令文  
には2つの型がある。(1)「命令文(原形動詞から始める)、and + SV.」と、  
(2)「命令文、or [or else] + SV.」である。詩人 Keats は、前者(1)の「～し  
なさい、そうすれば……」という命令文の構文を使用するのである。思う  
に、詩人 Keats は、厳粛に、

この夏の間中ずうっと僕と一緒にいなさい。そうすれば

貴方の名誉のために、彼の喜びのために必ず努力します。

と歌い収めるのだろう。出口訳を見ると、「夏の日に わたしとともに居て  
ください そうすればわたしは / あなたの名誉と 友人の喜びとのために  
努力するつもりです。」と読む。問題は、最終行の、his pleasure の his と  
いう所有格である。出口はそれを「友人の」と読む。すなわち、出口は、詩  
人 Keats の親友 Reynolds であると見るのだ。しかし、それは友人 Reynolds  
であって、よいのか、というのが筆者の疑問点である。

というのは、8行目に、in his mirth という同じ第三人称・男性代名詞の  
所有格が歌われているからである。この、his mirth の his は、既にも上に  
言及したように、7行目の、Phoebus を指す、所有格であるからである。こ  
れは決して、友人 Reynolds を指す所有格 his ではないからである。また、こ  
のように、his mirth, his pleasure という文脈を辿って見ると、矢張り、最  
終行の、his pleasure の、his は、Phoebus を指す所有格である、というの  
が筆者の解釈である。その理由は、Pleasure も、mirth もともに、「喜び」を  
イメージする名詞であるからである。前者の pleasure は、「喜び、楽しみ」  
の一般的な語であり、類似語に、enjoyment, delight, joy などがあることも  
承知している。また mirth は、「浮き浮きした気分や陽気な雰囲気」に満ちた  
喜び」をイメージする名詞であり、類似語に、glee, hilarity, merriment, jollity,  
joviality などがあることも、承知の上である。

所有格 his に対して、最終行の thine honour の、所有格 thine は、文脈

を辿ってみると、無論、第一行目の of thine の名詞の所有格 thine その人であり、第二行目の thy midmost trees の代名詞の、所有格 thy その人であり、第四行目の thine ear の、代名詞の所有格 thine その人であり、さらに、第十行目の thy spiriting の、代名詞の所有格 thy その人である。それ故に、最終行の thine honour の代名詞の所有格 thine は、勿論、先輩詩人 Spenser その人を指す。

最後の2行は、命令文である。命令するのは、詩人 Keats である。命令されるのは、友人 Reynolds である。親友 Reynolds に対して、「一緒に居なさい。そうすれば僕は必ず努力します」と詩人 Keats は厳格に歌い収めるのだと思う。

詩人 Keats が歌う、in the summer days の、前置詞 in は、鬼塚説によると、「杵・ふち取り」が基本イメージであるという。これは、「冬」と分ける境界をもった「夏の間中」という「杵」を作るという。また、詩人 Keats が歌う、for thine honour and his pleasure の前置詞 for は、「交換・埋め合わせ」(前提として、対象との分離)が基本イメージであるともいう。これは、これから「努力すること」と「貴方の名誉」とを、また「彼の喜び」とを「交換・埋め合わせ」するという。

面白いのは、詩人 Keats の目標が、対象の1つ目は「妖精の国の詩人」Spenser の「言語の音楽美と絵画美を有する名誉」であり、また対象の2つ目は「太陽神」Phoebus の「笑ったりする陽気な騒ぎ」であるということである。しかし、両者とも分離した領域であると、詩人 Keats は実感しつつも、両者の対象に向かって、今後の新しい「イギリスの詩」の創造のために努力するという、言わば、詩人 Keats の転換を明示する、作風である。これは、見事にして、且つ絶妙な詩興である。

親友 Reynolds のように、詩人 Spenser 一辺倒は却って、「詩人の中の詩人 Spenser の名誉」を汚すことである、と後輩詩人 Keats は心の中で呟くのだと思われる。Edmund Spenser の前に、「イギリス詩の父」といわれた Geoffrey Chaucer (1340 - 1400) が登場した。Spenser が誕生する、212 年前のことだ。その後、時代が移り、社会が変化する。Spenser の生誕より、

12年後に、あの偉大な劇作家 William Shakespeare が登場した。そして、時代は清教徒革命に向かうと、孤峰 John Milton が登場した。市民社会と事実の文学としての散文から、小説時代の到来を経て、イギリスに「ロマン主義」時代を迎える。自然詩人 William Wordsworth (1770 - 1850) を先輩と仰ぐ、純粋詩人 John Keats が登場する。Keats の生誕は、Chaucer のそれから数えてみると、455 年後になる。正に半世紀の歳月が経つ。Spenser の誕生から数えてみると、243 年後に、Keats が生まれるのだ。

当時の詩人 Keats は、それぞれの時代に生き、それぞれの社会の激動の中で独自の文学を築き上げた先輩詩人たちを回想する。Chaucer を始め、Shakespeare もそうであった。Milton もまた然りだ。「自分も Spenser や、De Hunt などの模倣」から脱皮して、詩人 Keats 独自の詩興を創造したい、旧態依然たる文学を壊して、斬新にして、且つ独自の「ロマン主義」文学を築き上げたい、と願うようになったと思う。親友 Reynolds のような「怠惰な擁護論」に惑わされることなく、自分なりの新しい詩境へと自覚し、羽ばたき始めたのが、この一篇の作品である。これは、詩人 Keats の詩人としての「転換」の作品である。

「模倣は子供の頃から人間につきものである」(Aristotle writes that imitation is natural to man from childhood.) という、古代ギリシャの哲学者 Aristotle (384 - 322B.C.) の言葉を想起する。諺に、「模倣は最も誠意ある追従なり」(Imitation is the sincerest form of flattery.) という。所詮、模倣は模倣である。たとえそれが最も誠意ある追従であっても、追従は追従である。お世辞はお世辞であって、お世辞は Spenser の名誉を汚すものだ、というのが当時の詩人 Keats の自覚である。Spenser への模倣や追従を脱皮し、Keats は Keats なりの独自の詩興を創造することが、即ち、「Spenser の名誉」を守ることである、というのが当時の詩人 Keats の目覚めでもある。

思うに、当時の詩人 Keats のこのような意図を踏まえて、詩人 Keats は、「貴方の名誉のために」(for thine honour)、と歌い上げるのだと思われる。そして、詩人 Keats は、あの太陽神 Phoebus の、「浮き浮きした気分や陽気な雰囲気に満ちた喜び」(mirth) に向かうのである。しかも、詩人 Keats は、

高らかに、「神の喜びのために」(for his pleasure)と歌い上げるのだと思われる。これが、最終的に、晩年の傑作中の傑作「ギリシャの壺のオード」(“Ode on a Grecian Urn”)に到達する、というのが筆者の解釈である。前置詞forの基本イメージは重要である。

しかし、イギリスでは、try for Aという言い方がある。例えば、She tried for a scholarship. (「奨学金を出願した。’)というふうに、である。これは、Cobuild 版によると、if you try for something, you make an effort to get it or achieve it.と説明する。これは、「〈物・地位などを〉得ようとする」「Aまで達しようとする」という意味であるという。詩人Keatsは、最終行に、try for A.という言い方を使用しているのか、という問題が残るのだが、しかし、再考するに、これは、文脈上、非常に不自然である。「一緒に居なさい。そうすれば貴方の名誉を得ようとするだろう」(I will try for thine honour.)とか、「神の喜びまで達しようとするだろう」(I will try for his pleasure.)では、矢張り、文脈上、可笑しい。これでは、詩人Keatsの転換の意向が消失してしまう。「我利我利亡者」Keatsのイメージが色濃くなって、詩的意図その物がおろかしい限りである。

これは、「最後の2行」(the Couplet)の世界である。「起承転結」の「結」の世界である。思うに、詩人Keatsは、この「イギリス風ソネット」の最後の2行に託して、イギリス人好みの一種の「警告」を発しているのが特徴である。それは、先輩詩人Edmund Spenser一辺倒の友人Reynoldsに対して、一種の「いましめ」を告げている作風である。それはまた、親友ReynoldsのSpenser追従に対して、追従は追従であって、追従は「Spenserの名誉」を汚すものである、という「注意」をうながす詩境でもある。

最後に、ロマン派の詩人John Keatsの傑作「スペンサーよ！貴方を敬う一人のねたむ崇拜者」と題するソネットを心して口ずさみ返してみようか。

スペンサーよ！貴方を敬う一人のねたむ崇拜者で、

貴方の詩歌の大森林の内奥にすむ一人の保護者が、

貴方の音感を楽しませるために是非奮闘努力して



一部の英語を優雅にするという約束を昨夜僕に求めた。  
然し、妖精の国の詩人よ、冬枯れの大地の居住者は誰も  
火の翼のついた黄金の破壊力の持主太陽神フォイバスの様に  
立ち上がることも、また或る日の朝が太陽神の浮き浮きした  
陽気な喜びの朝になることさえも、絶対にありえないことだ。  
不意に運命の岐路から逃れることも、また貴方の詩的靈感を  
受け取ることさえも、絶対にありえないことである——  
詩人の花は見事に開花することがあり得るとしても  
その前に花は土壌の生命力を吸収しなければならない。  
この夏の間中ずうっと僕と一緒に居なさい。そうすれば僕は  
貴方の名誉のために、また神の喜びのために必ず努力します。

と心静かに繰り返し口ずさみ終えた後、筆者の思うこと感じることは、今後の詩人としての John Keats 自身を、恐れ多くも太陽神 Phoebus に譬えていることである。太陽神 Phoebus は、既に上記に論及しておいたように、たとえ「冬の夜の暗闇」であろうとも、「火の翼」(fire-winged) を羽ばたかせて、「夜の暗闇」を破壊し、「朝」を創造する神 Phoebus である。この太陽神 Phoebus の、あの絶対的な破壊力 (a golden quell) に託して、詩人 Keats は、「当時の旧態依然たるイギリス詩壇への怠惰な擁護論」を破壊し、浮き浮きした陽気な喜びに満ち溢れた、清々しい朝 (a morning in his mirth) を表白する斬新な詩歌を創造したい、という真摯な決意を明示しているのは、絶妙である。

その詩興は、「太陽神 Phoebus が黄金の車に引き具をつけた」(Phoebus harnessed to his golden chariot) 朝その物である。これは、即ち「太陽がさんさんと照り始めた」朝その物であり、これはまた、即ち「太陽神 Phoebus がカラカラと声を上げて笑っている」朝その物である、というのが詩人 Keats の独自の解釈である。

この太陽神 Phoebus の笑い声を聞くと、誰もが「浮き浮きした気分」に浸ることができる、と詩人 Keats は強調する。そして、詩人 Keats は、さら

に、誰もが「太陽神 Phoebus の陽気な雰囲気満ちた喜び」を味わうことができる、と力説するのも、素晴らしい限りである。これは、さらに洗練された、後の、詩人 Keats の晩年の傑作中の傑作「ギリシャの壺のオード」の詩境、即ち、清々しい「声無き声」の詩境に連なる詩興である、というのが筆者の解釈である。これは先輩詩人 Spenser の詩境ではない。勿論、先輩詩人 Shakespeare や、Milton の作風でもない。これは詩人 Keats 独自の、斬新な詩境である。

また、今後の詩人としての John Keats は、自分を「花」(the flower) にも譬えている。しかも、花は花でも、「実のなる花」(blossoming) であるのも、巧妙である。ここに想起するのは、Great art flowers under favorable conditions. (「偉大な芸術は順境のもとでこそ花開くものだ。') という言葉である。この他にも、Her son flowered late. (「彼女の息子は後になってから伸びた。') という言い方もある。これらは、動詞 flower を使用した文であるが、しかし、名詞 flower を用いて、He brought a new art form into flower. (「彼は新しい芸術様式を開花させた。') という言い方もあることを思うに、詩人 Keats は、敢えて、ここに「花」(the flower) を歌い定めたことは、明らかである。しかも、詩人 Keats は、「実のなる花」(blossoming) に託して、例えば、He blossomed out into an important poet. (「大物の詩人に成長した。') というイメージを抱き奮闘努力する、という詩人 Keats の詩的意図も、これでさらに明白となるだろう。

しかし、これは筆者の憶測であるが、上記の「絶対的な破壊力」(a golden quell) の、名詞 quell を、Houghton 卿版によると、

To rise like Phoebus with a golden quill

Fire-wing'd and make a morning in his mirth.

と歌っていることを、既に上記に紹介しておいた。Houghton 卿は、御覧のように、名詞 quell ではなく、quill を用いる。これは、恐らくは「火の翼のついた黄金の羽ペンの持主」という意味であろう。

ここに想起するのは、The pen is mightier than the sword. (「文は武よりも強い。') という諺である。この諺を踏まえて、Houghton 卿は、太陽神 Phoebus

に、文人 Phoebus を重ねて、「羽ペン」で、清々しい「朝」を創造しようと、詩的工夫をこらしたのではあるまいか。というのは、Phoebus は、別に Phoebus Apollo というからである。Apollo は、ご存知のように、「詩歌・音楽」を司る、凛々しく美しい青年の神であるからである。

これもまた、面白い読み方であるが、しかし、筆者は、やはり、Allott 版や、Barnard 版、それに、De Selincourt 版の明示する、「火の翼のついた黄金の破壊力の持主」(...with a golden quell / Fire-winged...) と是非味読し精読したい。

さらに、Allott は、

Another reason for K.'s desertion of Spenser is suggested by his renewed interest in Shakespeare and Milton.

であると論及する。前半の「Spenser の世界を去って」という Allott 説には、筆者も同感であるが、しかし、後半の「それが Shakespeare や Milton に新たな興味を暗示するのでは」という Allott 説には、筆者は不賛成である、という立場である。

松浦説もまた、Allott 説と異口同音の感がある。松浦は、

内容的にいて、しかし、この詩は Spenser 讃美の詩ではなく、むしろ Spenser 脱皮の詩である。

と言及する。筆者もこの松浦説に全く同感である。しかし、松浦は、それに続けて、

いや換言すれば Spenser に代表される Hunt 的世界、空虚なロマンスや美的なものだけに陶醉していた唯美主義的文学に対する訣別の意思表示であり、また、名前こそ、出ていないが、より現実的、人生的、哲学的な文学への憧れ、——つまり Shakespeare に代表される詩と人生と真向に取組んだ、より真摯な詩的世界の希求が、このソネットには濃厚にある。簡潔に言えば Spenser から Shakespeare への転向、「驚異と感覚の時代」から「内省と思索の時代」への詩人の移向を如実に示すソネットといえよう。

と論断し推断する。しかし、「簡潔に言えば Spenser から Shakespeare への

転向」という松浦説には、筆者は不賛成である。それに、気になることは、松浦説の最終行の「詩人への移向」の移向は、移行の誤植ではないのか、ということである。

『ギリシャ神話』に登場する、この太陽神 Phoebus は、「黄金の破壊力」(with a golden quell) の持ち主である、と詩人 Keats は規定する。それも、この「黄金の破壊力」には、「火の翼がついている」(fire-winged) と、詩人 Keats が歌い定める。思うに、北欧の頑固な「冬の夜」であろうともなんのその、太陽神 Phoebus であれば、「火の翼」の一回の羽ばたきで、この北欧の長い厳しい凍てついた「冬の夜の暗闇」を楽々と破壊する、と詩人 Keats は歌うのだ。そして、太陽神 Phoebus であれば、イングランドに、新しい喜びに満ちた「朝」、楽しい「朝」を創造する、と詩人 Keats は共鳴するのである。

思うに、詩人 Keats は、今後の詩人としての自分を、この太陽神 Phoebus に重ねているのは見事である。「黄金の羽ペン」(with a golden quill) の持ち主となって、詩人 Keats は、「火の翼」(fire-winged) を羽ばたかせて、強固にして且つ「怠惰なイギリス詩壇」を破壊し、このイングランドに、喜びに満ち満ちた、新しい「朝」(a morning in his mirth) の、斬新な詩歌を創造したい、と歌い上げるのは素晴らしい。この転換点を境にして、世にいう詩人 Keats の天才は、あのように若い頃に開花したといえよう。

太陽神 Phoebus が創造する「朝」を思うに、想起するのは、正しく、毎朝6時30分になると流れてくる、あのNHKの『ラジオ体操の歌』である。それは、ご存知のように、

新しい朝が来た  
希望の朝だ  
喜びに胸を開け  
大空仰げ  
ラジオの声に  
健やかな胸を  
この薫る風を開けよ  
そーれ、イチ、ニ、サン

と流れてくる、子供たちの合唱である。5行目の「ラジオの声に」を「太陽神 Phoebus の笑い声に」と言い換えてみると、面白い。作詞は藤浦 恍。作曲は藤山一郎である。この他にも、日本放送協会が用意したといわれる、テーマソング『ラジオ体操の歌』がある。それは、

朝だ 小鳥の歌のなか  
呼ぶよ ラジオが ほがらかに  
リズムにのって のびのびと  
みんな元気で 体操すれば  
あなたも笑顔 わたしも笑顔  
若い力が湧いてくる

という歌である。作詞は脇太一。作曲は大中 忠である。2行目の「ラジオが」を、「朝の風が」に変えてみると、これは正しく太陽神 Phoebus の創造する「朝」ではあるまいか。

さらに、一般公募で選ばれた、  
躍る旭日の光を浴びて  
届けよ伸せよ吾等が腕  
ラジオは号けぶ一、二、三

香る黒土玉露踏んで  
跳よ躍れよ吾等がすあし  
ラジオは号けぶ一、二、三

清い朝霧涼風うけて  
吸えよ出せよ吾等が大気  
ラジオは号けぶ一、二、三

吾等手足の打舞ふところ  
強く明るく天地も躍る  
ラジオは号けぶ一、二、三

という歌である。歌詞は小川孝敏で、堀内敬三が曲をつけたものである。以上の、この朝の体操の歌を三曲心して、胸を張って歌ってみると、思い出すのは、A sound mind in a sound body. (「健全な身体に健全な精神 (が宿らんことを)」) という諺である。これは、ローマの風刺詩人 Juvenal (c60 - 140) のラテン語 *Orandum est ut sit mens sana in corpore sano*. (「健全な体に健全な精神があることを祈る」) からの諺である。これは当時の教育の理想を指すが、「健全な精神は健全な体に宿る」とも解され、mind のあとに、動詞 dwells などを入れて解する人もいるという。

思うに、このような太陽神 Phoebus の「朝」は、重複するが、詩人 Keats の晩年の傑作中の傑作「ギリシャの壺のオード」(“Ode on a Grecian Urn”) の詩境に到達するための、詩人 Keats にとっての「転換点」(Keats's turning point) であるというのが、筆者の解釈である。

それにしても、哀れ深いことは、胸に不治の病を持つ詩人 Keats にとって、北欧の島の国イングランドの季節は無慈悲であり、残酷である、ということだ。殊の外、冬は絶望的であることを思い合わせると、南欧の、古代ギリシャ、即ち、地中海の、あの青い空や、あの青い海、それにあの青々と生い茂る島と、あの燦燦と照りつける太陽などが恋しい、と詩人 Keats は暗に、且つ切々と歌い上げるのも、劳しい限りである。

#### (参考文献)

- Allott, Miriam ed. *The Poems of John Keats*. New York: Longman, 1986.
- Barnard, John ed. *John Keats: The Complete Poems*. Third Edition, Penguin Books, 1988.
- Craig, W. J. ed. *Shakespeare: Complete Works*. London: Oxford University Press, 1971.
- De Selincourt, Earest ed. *The Poems of John Keats*. London: Methuen and Co., LTD., 1920.
- Fuller, John. *The Sonnet*. The Critical Idiom 26, Norfolk: Cox and Wyman Ltd., Fakenham, 1972.
- Inglis, Fred. *Keats. Literature in Perspective*, London: Evans Brothers Limited, 1966.
- Keats, John. *The Complete Poems of John Keats*. trans. Deguchi Yasuo. Vol. I, Tokyo: Hakuouslysha, 1982.
- Leonard, John ed. *John Milton: The Complete Poems*. London Penguin Books, 1998.
- Lowell, Amy. *John Keats*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1929.
- Matsuura Toru. *Keats' Sonnets*. Tokyo: Azumashobo, 1966.

Palgrave, F. T. ed. *The Golden Treasury*. Oxford in Asia College Texts, Great Britain: Oxford University Press, 1964.  
 Takahashi Hidemine. *The Wonderful Radio Gymnastics*. Tokyo: Shogakukan, 1998.  
*The Complete Poetical Works of John Keats*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1912.

※拙文の作成にあたって次の事典・辞書・聖書などを参考にした。それぞれ付記しなかったものもあるので、お断りしておきたい。

Abunai Hiroshi. *Switch into the English Mode*. Tokyo: Kenkyusha, 2004.  
 Brewer, E. Cobham. LL.D. *The Dictionary of Phrase and Fable*. London: Classell and Company, Limited, MCMXII.  
 Courtis, Stuart A. The Courtis-Watters' Illustrated *Golden Dictionary for Young Readers*. New York: Western Publishing Company, Inc., 1972.  
 De Vries, Ad. *Dictionary of Symbols and Imagery*. London: North-Holland Publishing Company, 1974.  
*Dictionary of Symbols and Imagery*. trans. Yamashita Keiichiro. Tokyo: Taishukan Publishing Company, 1984.  
 Fowler, H. W. *The Concise Oxford Dictionary of Current English*. Oxford: The Clarendon Press, 1929.  
 Fukuda Ryutarou ed. *Color Oxford*. Tokyo: Fukutake Publishing Co. Ltd., 1984.  
 Hornby, A. S. et al. *Idiomatic and Syntactic English Dictionary*. Tokyo: The Institute for Research in Language Teaching, 1965.  
 Kawasaki Toshihiko. *Introduction to the English Literature History*. Tokyo: Kenkyusha, 2002.  
 Kihara Kenzou. *The New Century English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Sanseido, 1996.  
 Koike Yoshio. *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary*. Fifth Edition, Tokyo: Kenkyusha, 1980.  
 Konishi Tomoshichi. *New Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary*. Second Edition, Tokyo: Shogakukan Inc., 1973.  
 \_\_\_\_\_. *Taishukan's Fresh Genius English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Taishukan, 1996.  
 Minton, T. D. *English Grammar in Action*. trans. Abunai Hiroshi, Tokyo: Kenkyusha, 2001.  
 Nishio Minoru, Iwabuchi Etutaro and Mizutani Sizuo. *Iwanami's Japanese Dictionary*. Second Edition, Tokyo: Iwanami-Shoten, 1971.  
 Oki Fumihiko. *The Daigenkai*. Five vols, Tokyo: Fuzambo, 1933.  
 Onizuka Mikihiro. *The Powerful English Grammar*. Tokyo: Kawadeshobo, 2005.  
 \_\_\_\_\_. *Mechanism of English Grammar*. ASK, Tokyo: Pureisu, 2006.  
 Petersen, Mark. *Amazing Study of Real English*. Tokyo: Shueisha International, 2002.  
 Rossiter, Stuart ed. *England*. The Blue Guides, London: Ernest Benn Limited, 1976.  
 \_\_\_\_\_. *London*. The Blue Guides, London: Ernest Benn Limited, 1977.

- Saito Takeshi. *The Kenkyusha Dictionary of English and American Literature*. Third Edition, Tokyo: Kenkyusha Limited, 1985.
- Shibata Tetsushi. *The New Anchor English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Gakken, 1988.
- Shimamura Morisuke, Doi Kouchi, and Tanaka Kikuo. *Iwanami's Simplified English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Iwanami-Shoten, 1976.
- Shimura Izuru ed. *Koujien*. Third Edition, Tokyo: Iwanami-Shoten, 1983.
- Sinclair, John et al. *Cobuild's English Dictionary for Advanced Learners*. Third Edition, Harper Collins Publishers, 2001.
- The American Heritage Dictionary of the English Language*. Third Edition, Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1992.
- The Bible*. Tokyo: Nihon Seisho Kyoukai, 1956.
- The Holy Bible Containing the Old and New Testaments*. London: Collin' Clear-Type Press, n.d.
- The Oxford Dictionary of Quotations*. Third Edition, Oxford: Oxford University Press, 1979.
- Yamada Toshio et al. *Shinchou's Japanese Dictionary: Modern and Classical Language*. Second Edition, Tokyo: Shinchousha, 1995.
- Yamaguchi Shunji. *English Grammar: The Live Lecture Series*. Two vols, Tokyo: GogakuShunshusha, 2005.